

---

# B&B 第一章

因幡素兔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B & a m p ; B 第一章

### 【Nコード】

N 6 2 4 0 I

### 【作者名】

因幡素兎

### 【あらすじ】

都内某所に住む、二十代半ばの無気力な若者「琴乃葉真琴」の家に、突然現れる黒と青の姉妹。

突拍子もない訳あって姉妹との同居を余儀なくされたマコトは二人と共に暮らすうちに無感動な心を洗われていく反面、騒がしい家の居心地の悪さに逃げ出したく。一人の友人と親しくなる。

その名をクロトという。

くそれでもわたしは悪くな

い

## 序章 /

「ねえ、ママ、どうして人は人を産んでもいいのに人を殺してはいけないのお？」

「それはね。あなただって産んで欲しいけど殺して欲しくはないからよ。」

「ねえねえ、パパ、どうして人は死んだらいちいちお墓へ行くの？死んでしまったらゴミと同じじゃないの？どうして捨ててしまわないの？」

「それは違うよ。人は人だから人の気持ち分かるから人を無碍には出来ないんだよ。」

「ねええ教えて、お兄ちゃん。わたしはどうして分からないの？みんなの言うことがさっぱり理解できないわ。納得いかないの。世の中みんなおかしいわ。」

「違う、違うんだよ。みんながおかしいんじゃないよ。きっとおまえ一人がみんなとは全然違う所に居るんだよ。戻ってお

いで……。戻って……。おいで。」

なんで？どうしてみんなわたしを悪者にするの？わたしは悪くないか無いのに。わたしは間違ってるんか無いのに……。

みんなが繰り返し同じことばかり言ってる、そのルールと違う考え方は多数決で排除するなんてよっぽど悪じゃない。多数派が少数派

を弾圧してモラルと秩序を形成して・・・そんなのまるで時代精神も甚だしいと思う。戦争の時代には人殺しは許され、平和な時代には許されない。アニメでは正義が正義の為に悪の息の根を止めるのが正しいかと思えば少し時が経てばそれさえも暴力的とされる。科学が進歩するまでは物理の法則は魔法だらけだった。

この時代では当たり前前の常識が違う時代では否定されるべき対象にされる。それじゃあ、いつも時代精神（包括精神）の中で少数派と呼ばれる考え方を持ってた人はどうなるの？わたしたちは人とは少し見え方が違うだけなのよ？ガリレオだってキリストだって、そう。みんな間違ってたなんか居ないのに・・・わたし、間違ってたなんか居ないのに・・・。何でみんなわたしを否定そうとするの？

そんなの酷いと思う。だからわたしはやられる前にやる。否定される前に否定して行かなくや。わたしにはわたしの衝動という物があるのだから・・・。

「そうでしょ？マコトくん、分かってくれるよね？」

私は悪いとは思っていない。

昏黒とした夕闇も過ぎ去り辺りは暗黒の闇夜に包まれていた。そして明かりというモノがあるとすればソレは女の座り込む木製のベンチの隣の細長い電灯だけである。

ミドル丈のグラディエーターサンダルに黒のショートパンツそして赤のワークジャケット、濃い化粧の白い面に太いきつめのアイライン、それにマゼンダのルージュ。耳にはパールのイヤリングが煌めき、右手の中指には小さいダイヤの指輪が嵌められている。そしてその座る傍らにはヴィトンとエルメスの大小のバッグが親子のこけしの様に静寂に置かれていた。それはかなり高級なブランド物である。市場では云十万から云百万単位で取引される代物だが、そんな高価な物を持っている割にはその女は一見非常に若い二十代前半

の年齢に思える。かといってそれでは良家の家の娘なのかと思えば、またそういう風にも見えなかった。

女は右手にたばこ、左手はジャケットのポケットの中、片足を上げて組んだ座り方と苛ついた目線に浮ついた唇。たぶん育ちは一般レベルと思える。要するに上品さに欠けるのだ。

それではそんな彼女がここで今何を待っているのか。そう、確かに彼女は待っていた。

暗夜の公園。口ごもる夜が流れる。暗黒の広場。

彼女が足を組み座るベンチの位置からちょうど広場の向こう正面の高木の頭を追い越してさらに向こう側に窓明かり煌めく褐色の高層マンションがそびえている。

島田響子はその日、独り女性の身でありながら夜そんな人気のない場所ですし、とその高層マンションを眺めていた。

右手には先ほど点けたばかりのキャスターが怪しい紫煙を闇夜に立ち上らせていた。

島田響子は深いため息をつく。同時に一条の紫煙が細長くその口から噴射された。彼女はそして何度も思う。

私は悪いとは思ってはいない。言ってしまうえば、これは一種の慰謝料なのだから。私はもらって当然なのだから。あいつのせいで私は一生を台無しにされたのだから。だから、私は悪いとは思っていない。

繰り返し思っただけで足下の何も無い公園の地面へと視線を落とす。彼女は冷めた目でいても心なしかどこか弱々しかった。

たばこを持つ右手とは反対側の左手は押し込むように上着のポケットに入れられていたが、徐に彼女はその手を抜きだした。

するとそれはあまりに酷い形をしていた。小指から人差し指までの指が無かった。いや、辛うじて中指と人差し指の付け根の関節部分が小さく手のひら先から突き出ているだけだった。まるで壊されてしまった人形の手の様な現実味のないその姿はある種の絶望の形のようにさえ見える。ハッキリ言って彼女の左手は手として充分に

機能が満たせるとは到底思えないような姿をしていたのだ。

彼女はそんな痛々しい左手を自らの眼前に映す。そんな自分の現実を見つめて、怒りとも悲しみともとれないような険しい表情をしていた。

しかし、また表情は変わる。左手を再び上着のポケットへ押し込むと彼女は地面に伏した視線を泳がせた。そして眉をひそめる。その貌は何所か背徳めいていて、それが少し何かが彼女自身に背後から実は重くのしかかっているような風だった。

夜風が頬を冷たく強ばらせる。彼女は軽く腕を組んで徐に目を閉じた。

それにしてもこの前から二月と経っていないのに前の分はもう遣ってしまった。やっぱり自分で稼いだ金でなくてはダメだ。あつという間に遣ってしまう。しかし、それでもちよつと無駄遣いが過ぎるかもしれない。

そう思うとここに来ていながら自分を戒めるように彼女は眼を力ツと見開き、たばこの火を地面に捨ててソレを赤いヒールで捻り踏み消した。グリグリと必要以上に力を込めて土を踏み捻った。何かもの凄い量の鬱憤を晴らしきろうとするかのように憎そうな眼を下に向けながら。彼女はたばこの火を始末するとつまらなそうに視線を高層マンションへと戻した。

ヒュルリと夜風が頬を撫でて夜が口ごもる。夜の帳の元、高木に囲まれた公園。ひっそりと佇む電灯の横のベンチ、ソコに腰掛ける彼女はある意味、殺伐としていた。いや、それぐらいの気持ちでなければこんなあくどいことは続けられないのかも知れなかった。

それから彼女はショートカットのワックスで乱した茶髪を憂鬱そうに右手でくしゃくしゃと軽く整えて、白いブランド物の小柄な方のバッグから右手で器用に携帯電話を取り出すと時間だけ確認してまた閉まった。

そろそろ約束の時刻だ。遅れてきたらソレを理由にもう少し請求してもいいだろう。

そして彼女はそんな風に思っ  
て夜風と一緒に冷え冷えとほくそ笑  
むのだった。

しかし、彼女は知らない。自分がこれから久遠の彼方抜け出せぬ  
本当の暗闇の底へ誘われることなど、今は誰も知らなかった。いや、  
殺人鬼は知っているのだろう。彼の者だけはいつだって、起こる前  
に知っている。きっとそれは起こす者だけの特権の様なものなのだ。

「そうよ、お兄ちゃんを殺したのもわたしよ。」

殺人鬼はおよそ自白とは受け取れないような口調で、そう告げて  
仄かに嗤った。

## Broken Blues

そう、その頃俺は二年間通った専門学校を卒業して丸4年、夢と  
いう前向きな姿勢にだらりと寄りかかり自宅と編集社の長い道のり  
を行ったり来たりして、実のところ何の前進も見られないような憂  
鬱な生活を送っていたんだった。

「うーん。このヒロインちょっと普通過ぎるんだよなあ……。」

倉本さんが苦い笑みを浮かべて不満をこぼした。

「はぁ・・・。」

と、いつも通りの反応に俺はただ依然と短く答える。

倉本さんは指の爪をしきりに前歯で挟みカチカチ鳴らす。そして少し小太りの中年らしい二重顎がさらに重圧を増す。それほど首を曲げて顎を引いて手元の原稿を伏し目にじっと見つめる。そんな倉本さんは良くも悪くも真面目だ。

そうしてしばらく静止して、また再び調子よく説教を続ける。

「うーん、そうだよねえ・・・大事なことなんだよね、琴乃葉くん。君にとつて魅力的な女性ってどんなかなあ？」

「・・・魅力的・・・ですか・・・？」

ま、いちおう聞き返してはいるが実際の所、俺はただ空返事をしているだけなのだ。しかし、倉本さんはいたって真面目だ。

「うーん。こう、もっと自分をひけらかしちゃっていいんだよね。自分の好みを読者に押しつけちゃうってわけじゃないけど・・・うん。」

軽くジェスチャーを加えながら自分で言っただけで頷いてしまうほど倉本さんは真面目だ。そして俺は・・・。

「はぁ・・・わかつたつす。また練り直してみます。」

空返事のまま、編集社を後にした。去り際に倉本さんは「諦めたらそれで試合終了だよ」とありがたい名言を送ってくれた。実に真面目で面倒見のいい人だ。

しかし、そんな声援をもらえるほど俺は・・・あまり真面目な人間じゃないのかも知れない。

元々、漫画を描くことにしたのはその場しのぎの理由だった気がする。

高校の時に漫喫に通い詰めて読んだ本のタイトル総数は30を超える。冊数では軽く三桁を上回るだろう。

ちょうど高校の時期とは進学か就職かを迫られる最終段階。俺としては就職をするなら高卒ではスパーか運ちゃんか工場系しかない

いのでそんな夢も希望もさしあたって華やかさに欠けるものへは向かいたくなかった。

だから俺は考えた。考えて考えて、来る日も来る日も満喫に通い続けた結果、ふと気がつくと自分が手にしているそのコミック本こそがその目指すべきものじゃないかと思った。いや、結局「好きなこと」「夢」と安直に理解していいならあながち間違っではないなと思う。

そんな程度の経緯で二年間ほど俺はデザイン学校に通った。まあ、とりあえずは絵というものが描けなければ実現不可能な夢そのものである。そんなドリームをリアルに昇華させるべく俺はデザイン学校の課程を終業。華々しく社会人第一歩の作品を完成させたのが四年前の春先。

そしてその記念すべき第一号作が某雑誌の読み切りに乗るという快挙を成し遂げて、泡のように消えたのも四年前の春先。

それからかれこれ丸4年。こうして今年の春先をまた同様に編集者から重い足取りで帰っているところを見ると、この4年は短かったの一言に尽きる。

いや、もうすべからく十代の頃は時間がカタツムリの如く鈍かった。

「たゆまざる、歩み恐ろし、カタツムリ」と言う有名な彫刻家の句があるが、これは単に持続することの偉大さを説いているだけではなく、十代の頃の恐ろしく遅く且つ有意義な時間のゆとりのことを説いているのではないだろうかとさえ思わせる。(ちなみにこの句は中学校の卒業式で校長が壇上で語っていた言葉だった気がする。)

とにかく今の俺は4年前と何一つ変わってはいない。というかそれ以上に4年前より夢というモノの鮮やかさが色あせているような気さえする。

今年で二十五歳だ。

結局、俺が漫画に対してどの様な情熱を抱いていたのか定かでは

ないことに今さらながら気付く次第だ。

たぶん、遅かれ早かれぶつかる壁なのだろうが。自分には才能はあるのか？という疑問は夢追い人には当然ついて回る不安なのかも知れない。そして俺の場合、本当に思いつきのように決めた夢なのだ。そんなものに神様が才能などというモノを贈ってくれると信じれるかという、俺はそれほど楽観主義者でも無ければパッションのある男でもないようなのだ。

まあ、とにかく、と言うわけで今年の春先もため息混じりの帰路に行く。足取りは依然と重い。そして少し腹が減った。

今、下り電車の窓から外を眺めているのだが、どうやら日はだいぶ傾きしばらくすれば夕焼けがその下の町を燃やすだろう。が、おそらくその夕焼けでは俺の焦燥感さえ麻痺したような沈みきった心までは、焚き熾すことは出来ないだろう。

なんか黄昏れているのか、打ち拉がれているのか、諦観めいているのか、よく分からない心情だと思うだろうが、自分でも自分の心をうまく説明できるほど理解していないのである。

俺はそんなこんなで電車を降りる。そこから歩いて帰路をまた行く。私鉄の駅から幾つかの角を曲がり宅地へ入りしばらく進むと二階建ての四角い量産型、琴乃葉家が見えて来た。

家に入る前に隣家の花壇の手入れをする市原のおばさんが横目で俺を見つけて声をかけられた。

「あ、真琴くん。遅かったわね。お父さん、さっきまで帰ってきてたみたいだけど・・・また出てちゃったのよ。」

「はあ、親父ツスカ？」

なんだアイツ何しに帰ってきたんだ？俺は小首をかしげて市原さんを軽くあしらうととりあえず詳細不明のまま我が家へ入る。そして玄関に妙な二足を発見。

「・・・小さい靴・・・。」

そう、しかもたぶん女物の靴が二足綺麗に並べられて玄関に置いてある。

誰か来てるのだろうか？親父はまた出ていったって言ったな。な  
ーんか俺忘れてるような気がしてきた。

小首をかしげ眉間にしわを寄せながらもとりあえずはリビングへ  
続くドアへ向かう、そしてそのドアを開けると。

「あ、やつと帰ってきた。」

「……………ふう……………」

青い方が”やつと”黒い方は”ため息”そして俺は、ドアの前で  
数秒固まり、なるほど思い出した。

「何やってんだ？おまえマコトだろう？」

「え……………あ、ああ。」

青い頭の少女が直球な眼差しで俺を見据えて、少し反応に困る。

「なんだ、おまえここは自分の家なんだからもつと堂々としてい  
いんだよ。てゆーかしなさいよ。そして座りなさいよ、まず！」

はいはい、今すぐ。と、いうよりこの子達が？

ひとまず混乱しながらも実はまあ目の前の二人の存在理由はいち  
おう知っているのでなるべく落ち着いて、二人の並んで座るちゃぶ  
台の面と反対側、二人と向かい合う場所に迂回して座るが、何故か  
正座。

「では、さつそく。」

青い頭の少女が言った。というよりその少女の横の黒髪の少女は  
さつきからため息以外の音を口から発さない。ずっとこつちを冷め  
た目で見据えている。ある意味侮蔑的で辛辣な感さえある。

「わたしが姉の青果です。好きなことは日々の面白いエピソード。  
好きな言葉は今現在はシースルー。趣味は日常をより充実した冒険  
へと導くこと。です。よろしく。」

濃く染めあげられた青髪はショートカットで、もみ上げ部分の横  
髪だけが細長く垂らされている。一直線に見開かれた瞳。長いまつ  
げ、健康的な肌色と小さな貌、そして着ているタイトなパーカーの  
色は髪と同じく青。真っ直ぐに花の開花の如く見開かれた眼差しは  
物怖じというモノが一切無いというか、ある種、怖いモノ知らずで、

「一瞬”怖いモノ見たさ”という言葉が思い浮かんだ。まあ、冒険心のようなものを感じる面持ちなのだ。」

「ほら、おまえもだよ。」

青果と名乗ったその青い方の少女に片肘で促される黒髪は実にめんどくさそうに姉の青果を睨み付けてから俺を一瞥して不機嫌そうに視線を壁に向けた。

「空木黒葉。以上。」

感情のこもっていない平淡な口調。ソレだけだった。黒い少女はそう名乗って素っ気ない表情を壁と向かい合わせている。

闇のように黒いロングヘアで前髪をオシヤレに分けている。そして髪の色と対比して際だった白桃の様な白い肌と端整な顔立ち。まるで等身大の人形の様な姿で姉と同じタイプの黒いパーカーを着た、黒葉と名乗る少女の最大の特徴は何と言っても、その目つきだろう。

上瞼が座っているというか、非常に眠そうな目つきは元々大きい瞳が無ければただただ目が細いだけだが、彼女の場合、瞳が大きい上、まつげが姉同様長いので細い目というより綺麗系女のデートがつまらないときのお高くとまった表情という感じがする。それなのに彼女自身はどこをどう見ても中学生か小学生の少女に過ぎずお高いとか綺麗とか似合う年頃ではないのがギャップだ。そして姉とは対照的にその表情からは了別を終わらした人間の何やら諦観めいた落ち着いた雰囲気を感じられた。それがある意味、侮蔑的で人を見下したような感じさせるのかも知れない。

「で？いちおう知ってはいるけど、おまえも何か自己紹介のようなことをしなさいよ。こっちだってやってんだから。」

青い姉の方が腕を組んで偉そうに言った。と、それなのに俺は違うことを質問。

「あの、親父はどこ行ったの？」

最初から気になってたことだった。

すると青い方は唇を尖らせる。黒髪はムスッと遠くを見据えたま

ま。そして青い方が真っ直ぐに俺の目を見返して。

「また仕事だつて。ずっと待ってただけとおまえ全然帰ってこないから、今頃は飛行機の中だよ。」

えーと、事の発端は昨日突然鳴った国際電話だった。

いや、電話の相手は実の父親なのだが。親父は俺が小さい頃から海外に単身赴任するような仕事を続けているので、だいたい親子の交流は決まって国際電話の貌もない会話なのである。

お袋が死んだときも海外から戻ってきたときには、まだ高校生の俺が葬式の算段をやつとで済ましたときだったぐらいで親父とは幼少期より「また遊びに来てね。お父さん。」と言つて家から送り出す様な疎遠な関係だ。とは言つてもお袋が死んでから俺にとってこの世でただ一人の頼れる肉親であることはDNAレベルで否定できない事実だし、実質、これまでもこれからも俺の生活を支えているのは親父の稼ぎと親父名義のこの家だけであることも否めない事実だった。

そんな微妙な関係の親父だが、昨日、突然電話してきたかと思うと、また唐突にこんなことを言い放った。

「喜ベマコト、明日から家族が二人増えるから。」

俺は一瞬自分の耳を疑った。この親父はとうとう五十を越えて痴呆にでも侵されたのだろうか？だとしたら誰が介護をしてやらねばならないのだろうか？

「何言つてんだクソ親父！意味わかんねえぞ！俺は今おめえのおふざけに付き合ってる暇は無いんだよ。悪いけど早々に用件を言うてくれ。」

俺はその時、味気ない原稿を書き終えて色んな意味でナイーブになつていたので機嫌が悪く殊更、激しい口調で親父を非難した。

しかし携帯電話の向こうは電波が悪いらしく雑音やら音が途切れ途切れになるやらでまともな会話が出来ないらしい。

親父は「なんだ？聞こえんぞ。もっと大きな声で喋れ。」とガ-

ガーとうるさいBGMと合わせて言ってからまた途切れ途切れに説明をはじめた。どうやら、空港とか町中とか騒がしい場所で電話してるらしい。

「実は訳を話せば私の で空木 、その方が不幸に会って二人娘が 。私は空木

しまった。 二人の子を面倒を 難しいし、

子供達も日本が良いと言うのでな、マコト、おまえも二人の妹

可愛がってやってくれよ。」

「妹・・・？ いったいどういう事だ。 親父電波悪くてよく聞き取れねえぞ？」

「 明日 行くから。」

プツツ、ツ ツ ツ 。

親父はそんな難解ながらもそれなりに理解できる説明を残して電話を切ったわけだ。

国際電話の電波が悪くなることは多々あることだったし、聞き取りにくいのも慣れていたので暗号解読もお手の物、俺はその親父の説明から以下のことを了承した。

まず、明日から二人の子供が家にやってくることに。そして二人はどうやら俺の妹であること、つまり親父のヤツ、母さんが死んでから八年と経ってないのだから確実に浮気してやがったってことだが、それはこの際置いておいて、明日その二人の妹が俺の家に来るらしい。その時親父をとっちめてやるうと俺は決意していた・・・が、それなのに。

「おい、マコト、しっかしおまえデカイねえ？ 幾つだよ身長。」

青い髪の毛のセイカがまったく人見知りも物怖じもしない真っ直ぐな目線で俺を見据える。

「え、と183だけど・・・。」

未だ俺はうるたえながら答えるとセイカは意外そうな貌をした。

「なんだ？ その程度か中途半端だな。 どうせだったら二？ を目指しなさいよ。 つまらない。」

「……………」

うるたえる、そう、ソレも仕方がない。この子達は少し独特すぎる。だいたい”つまらない”って俺は別に自分で好き好んで今のタッパであるわけじゃないし。まったく親父のヤツさっさと消えやがって言つてやりたいことがいっぱい溜まってるのに、これじゃあますます不満が増える一方じゃないか。そしてセイカって子はどれだけゴイングマイウェイなんだ。それに何より黒い方のコクハって子は何だつてさっきから機嫌が悪そうなんだ。

率直に言つて、親父は俺にこの妹たちを押しつけたのではないだろうかという不安がすぐさま頭を駆けめぐり、あの親父ならやりかねないと思わないでもない。

どうせ、空木さんという女の人と出来ちゃったけど空木さん自身に不幸があつて子供を引き取る羽目に、しかしあの親父が育ち盛りのおてんば娘達を飼い慣らすことなど不可能、そして日本で健気にも生きながらえている息子に押しつけようつて算段に違いない。

本当のところ俺は子供の面倒を見るほど精神的余裕はないし、むしろ自分のことにも余裕など持ててないし、というより親父、戻つてきて連れて帰れと言つてやりたい。何が”喜べ”だ。冗談じゃない。今度帰つてきたら親父の奴め、ただじゃおかねえ……。

しかし、今はとりあえず現実を受け止めなければ、妹たちはそのうちには親父に送り返すとしてもしばらくは一緒に暮らさなくてはいけない状況のようなのだ。

いちおう最初に言っておかねば。

「あのさあ、最初にちよつと言っておくけど。」

俺が切り出す。するとセイカは「どうぞ」と片手で促した。コクハはもちろんブスッと俺を通り越して後ろのベランダの外を眺めている。

「正直、いきなり妹って言われても俺は兄として君たちに何かしてあげられるような人間でもないんだ。そのなんて言うのかなあ、期待には添えないというか……。」

しどろもどろになりゆく俺の言動を前にセイカは疑問そうにはてなと首をかしげた。

「……妹……。」

そしてコクハが小さくそう呟いた。

するとソレを制するようにセイカがコクハの首根っこに腕を回し、二人で俺に背を向け何やら内緒話を始めた。俺に聞こえないように小さな声で二人は背中を見せて会話する。

そうしてしばらく二人は半ば言い合いのように「本気か！」とか「いいのか？」とか時々声を荒立てながら密談をするとまたしばらくして意見が纏まったようでコクハが小さく、セイカが大きく頷きあって、徐に振り返って二人一緒に俺の貌を見つめた。

まだ子供とはいえこれだけ綺麗な人形みたいな二人に同時にじつと見つめられれば俺も貌がほてる。正直、あまり直視されたくないほど艶めかしい二人だ。俺は視線を泳がす。

「マコト、別に気を遣わなくてもいいんだよ。」

セイカが大口を開けて言った。なんか少し愉しげにも思えるような真面目な表情だ。まあ、微笑を含んだ前向きな貌と言ったところか。

「わたし達はこの世の中で数少ない血の繋がった仲間だから、お互い助け合って生きていければ幸いだろ。あと、いちおう言っておくけどわたしもコクハも名字は空木だが、その辺は察してくれよ。世の中には目に見えぬ深い事情というモノがあるものさ。」

なるほど、つまり親父と空木さんは結婚はしていなかったから性は母方でも言いたいのだろう。

何か少しは姉妹が健気で可哀想にも思えてくるじゃないか。中学生で母親を亡くし、内縁の父親には見知らぬ兄と一緒に暮らすように言われたのでは実に不憫だ。同情するよ。しかし、助け合う……ソレに関してはあまり俺は助からないのでは無いだろうか。むしろ面倒ごとを押しつけられた結果は変わらない。どんなに姉妹が不幸な身であろうとまだ足下もおぼつかないような成人して間もない男

が面倒を見るのは簡単では無いし、無責任なことが起こったって責任をとれるほどの社会的なモラルなど持ち合わせてはいない気もするのだ。それこそ不幸だと思うし、それでもまかされた以上は親父に突っ返すまではなんとか責任を取らなければならぬのがさらに不幸で悲しいところだ。

とはいえ、助け合い、ひよつとすると姉妹をうまく使えば今より生活が楽になるかも知れないとふと思わないでもない。のだが、そんな甘い考えは次の瞬間からかき消えることになる。

「なあ、ところで夕飯はまだ作ってはくれないのか？わたし達はもうペコペコなんだけど。」

セイカはいつの間にかくつろいでテレビを点けて見ていた。コクハは何か小さい文庫本を片手に読書をしている。

そうか、とりあえず食事を作る助け合いはやはり俺の仕事なのだろうな、と俺は流れるままに台所へ向かうのだ。

たぶん洗濯をする助け合いも、掃除をする助け合いも、買い物をする助け合いも、予もすれば俺なのだろうなと思わないでもなかった。

Blue

1章 Black n

どうやら夢を見ているらしい。

四角い広い部屋。白い塗装を施された壁。並べられた無数の椅子と机。黒板、教卓、そして夕刻の茜の日差しがそれらを色づける。暗く朱に染まる一室。たなびくベージュのカーテン、ベランダの向こうの燃える日差しを遮るように佇む黒髪の長い少女。

全ては短く何の情動も感じさせない薄っぺらで味気ない。まるで美術館で見る額縁の中の偶像のように思えた。

でも、そこは教室らしかった……。

たぶん、身に覚えのある風景。たぶん身に覚えのある少女の怪しいシルエット。夕日を背中に浴びて少女の姿は黒いシルエットのように翳って、まるで写真立ての中の一枚の様な淡い情景。俺はそんな風景を前に敢然と佇んでいた。

ここは確か小学校だった気がする。俺の通った小学校・・・俺の通った教室。

うつすらと解離した意識がそう思った。でも、また夢の中の俺は違うことを思っていたように思う。しかし、何を考えていたのか？それは分からない。

おれは知らず動いた。

一步、二歩、三歩。俺は少女に近づき、また話しかけた。

俺が何か言っていると少女はすり抜けるように日差しから抜け出しその姿を露わにする。

赤みのほどよい唇。端正な目鼻立ち。その幼さを忘れさせるような凜とした線の頬。ストレートパーマのような長髪が胸元まで垂れ下がっていた。

それは美少女だった。でも玲瓏としたその美しさには何所か歪な割れ目のような危うさを感じた。それも、たぶんその表情。

瞳が黒色に浸食され、何かハイエナじみた渴いた狂気を感じさせる。それなのに笑っている。いや、嗤っている。不気味な笑顔はまるでパラノイアにかかった人のような執拗ささえ彷彿とさせた。

少女は狂っている。俺は客観的にそう分かった。きっと分かっていた。でも、この夢の中の俺はまだ分かっていなかったようにも思った。理由は無い。ただ漠然とこの状況に俺は、郷愁という名の恐怖めいた何かを感じていた。

そんな俺を横に夢の中の俺と少女は会話を交わしていた。夢の中の俺と夢の中のその少女は幾つかの会話の中で時には嗤い、時には真顔で喋っていた。

でも、その会話を俺は聞くことは出来なかった。それどころか椅子の動く音、机の引きずれる音や風の気配さえ、聞こえてはこなか

った。ただ映像だけが消音した動画の如くザラザラと時を刻む。

不気味に微笑む少女。何か言葉を返す俺。朱色と暗がり に没する教室。風にたなびくカーテンと幾多の椅子そして机……。二人だけの放課後……。ノイズじみた映像。壊れかけた女の子。

そして音のない教室。

次の瞬間、突然少女がユラリと何かを取りだした。滑らかなその切っ先の先端、鈍い光を眼前で捉えた。

それは短い果物ナイフだった。木目の柄のついている刃渡り十？ほどの小さなリンゴの皮を剥く為のナイフ。

ソレを鋭利な刃物だと認識するまで俺はバカなこととその鈍い煌めきに美というモノを感じていた。でもすぐにその正体がなんなのか認識すると一瞬猛烈な悪寒が背中から首筋にかけて駆け抜けるのを脳裏に感じた。

何かを思い出したような強烈な閃光が走った。するとどうだ？音が甦ってきた……。

「マコトくん？」

少女が言った。見かけの幼さとは違ってかわつてとても張りのあるしつかりした綺麗な声だった。音が甦ったのに教室は押し黙って静かだった。ソレはまるで闇のように静寂で殊更少女の一言一言が脳に響いた。

「わたし残念よ。あなたならきっと、分かってくれるとおもってたのに……。きつとお互い違う所に居ただね。きつと似ていてもちよつと、大事なところが違つたんだね。本当に残念。さようなら。さようなら。」

ゆっくりと振り上げられたナイフを、その鈍く煌めく切っ先を眺めて……。俺は……。俺は……。その全てを思い出した。

次の瞬間、パツンと停電するように意識が飛んだ。心がシャットダウンして暗闇の中、意識が、何か猛烈に拒絶し収縮しそして闇に閉ざし、全てのメモリをまた深く追いやり、今の自分を再起させる

音が次第に膨らみ受容し、……。そしてまた、その何もかもを忘れさせた。

/ 1

目を開き貌を上げると、そこは、我が家だった。

どうやら夢を見ていたらしい。起きてしまうと内容はどこか遠くに飛んでいってしまっていたが、たぶんろくでもない夢である。その証拠にわき汗とか半端ではない。

悪夢、それがどんな様な夢なのかは分からなくても、少しぐらいは想像がつく。と、いうのも昨日、セイカが妙な物を持ち帰ってきたことが原因では無いかと思われるからだ。

俺は仕事をしながらうたた寝をしていたらしい。目の前のちゃぶ台には漫画のネームノートとその他の画材が広げられていた。

右手はHBの鉛筆を握ったままだ。ガランと白けた茶の間。誰も居ない。姉妹は今は学校で授業を受けている時間だった。

俺は汗ばんだ身体を持ち上げるとキッチンへと向かう。どうも悪夢の感触がしこりのようにまだ脳裏にへばり付いている気がする。思い出せない。思い出せないが、嫌な夢だったのは分かる……。

冷蔵庫から麦茶の入れ物を取り出すとコップに入れて蒸し暑さと脳裏の不快感を洗い流すように一気に飲み干した。首筋から背中にかけてもべつたりと汗がTシャツを貼り付けている。それらが身体を通る麦茶で一気に冷やされて心地よい冷気を感じた。

こんな悪夢を見たのもたぶんあれの為だろうか？

それはひょんなことから昨日セイカが俺の仕事の手伝いをするとか言い出したのが切っ掛けだった。

その日もそうだが、セイカという少女はこの家に来てからというもの妹のククハとともに我が家の和室の茶の間に住み着いている。この茶の間には冬にはコタツになる畳一畳より一回り大きめのちゃ

ぶ台が置かれてあり、液晶TVあり、エアコン完備、さらにベランダから庭先を望める。とても居心地のいい場所で俺も一漫画家としてこの様な過ごしやすい場所で仕事をするのは当然。もうかれこれ四年以上はその場所は俺だけのすみかであり仕事部屋であったのだが、しかし。

最近現れた二人の姉妹によつてその聖域が侵されようとしていた。もとい侵されてしまった。いや、俺としても姉妹の部屋を用意するなどある程度の抵抗は試みたのだが、全ては見透かされていたらしく「わたし達を追い出そうなどと」「甘いよ。」と一笑に伏されてしまった。

いや、別にいいじゃんか茶の間ぐらい一緒に使つてやれよと思うかも知れないが、ことは意外に重大である。

というのも黒髪のコクハはこの際良いのだが問題は青髪のセイカだった。

「なあ、おまえ漫画なんか描いてて何が愉しいんだよ。こんな物は描くもんじゃなくて読むもんでしょ。」

学校がある平日はまた良いのだが昨日のような日曜日なんかは最悪なことにヤツはほぼ一日中茶の間にいた。そして俺も茶の間にいた。当然だが俺は漫画の原稿を造っている。とても集中力のいる作業である。そんな集中している俺に対してあのセイカという妹はどかどかとちよつかいをかけて水を差してくるのである。

つまりいよいよ本題だが昨日何を思ったかセイカが突然妙なことを口走つたのだ。それもおそらくソレまで俺がヤツの横から入れるちゃちゃを全て無視していたせいもあるのだろうが。

「なあ、なんか手伝つてやるよ。                   ほら、トーンとか凄い貼るよ、わたし。」

この一言。これに対し俺はこの時その場しのぎの閃きでヤツをこの家から数時間でも排除できればと携帯電話を渡して、外の景色を出来るだけ多く撮って来るように頼んだのだ。これが悪夢の始まりだったと言えば、まあ、長い意味でも短い意味でもそりゃそうかも知れないが、そんなことを言ったら実も蓋もない。まあ、聞いてほしい。

セイカはこれに対し、非常に大任を受けたような貌をして”資料採集！？望むところだ”とはりきって家を出て行った。残った俺は行儀良く静かに読書が続ける黒い方の妹に感謝して作業を続ける。

そして驚くべき事にその5時間後。午後六時を迎えた頃、セイカは忘れた頃に戻ってきたのだ。

正直、コヤツの行動力と体力は気分さえ乗ればどんなにくだらないことでもゲージが底なしに尽きないらしいと、この時は俺もある意味感心した。だって5時間だぞ？信じられない。よっぽどな写真マニアなら分かるが、写メで甘んじる程度の意気込みではこんな長時間の撮影は出来無いと思う。

そして落ちだが実はこの時セイカが持って帰ってきた画像の中に悪夢を引き起こす様なその妙な物が写っていたのである。

ヤツは帰ってくると何やら集中していた俺にさっそく水を差すように仕事の確認を急かした。そして俺は撮ってきた画像の確認を余儀なくされた。その量の膨大なこと。メモリいっぱいいっぱい撮って来やがったんだからどうしようもない。

幾らか見ている内に我が琴乃葉家が顕在する生駒町から隣町の金城、その隣のS師ヶ谷、さらに進んで最終的にはS北沢のあたりまで画像は歩いていくので呆れる。余程暇なのかコイツは、と少々面食らった。

そしていよいよ問題の写メに近づく。

そこはS北あたりの高層マンション前の広い公園だった。この辺りまで来ると俺は横のセイカに時々画像の説明をさせながら半ば投げやりに楽しんでいた。

「ここは？」

「ああ、ここは下北あたりの住宅街の公園。」

「これは？」

「ああ、よく見つけたね。これは生のシヨン便小僧だよ。小学生くらいかなあ……。」

「これは？」

「ああ、木に登って降りれなくなった少年。ハプニングっぽい感じが芸術的な作品だね。」

「助けを求めてるよね。この引きつった表情は……。」

「うん、でもそのままにしておいたよ。あえて題材には手を触れないのがわたしのポリシーでね。ほら、NHKでよくやってる絶滅危惧種の動物の特集でも、雛が親鳥と離ればなれになって他の野鳥に喰い殺されるのをカメラマンは見殺しにしてるじゃない……あんな感じだよ。自然の摂理は憂えても手は下さない厳しい心つてヤツだな。うん。それにカメラマンというのは映像に自分の思いを込めてはいけない、あくまで客観的で写実的な立場を守らなければいけないというのがわたしの持論でね。」

なるほど無慈悲なヤツだ。しかも木登り少年は自然の摂理の危惧種的な存在なわけだ。そして客観性の挙げ句の果てが盗み撮りと……。

そしてコレは公園の出口のゴミ箱か……？なんだ？なんか変なモノがゴミ箱の黒いビニールからはみ出てるぞ。

鉄網製のバケツ型のゴミ箱には半ば押し込まれたように黒いビニール袋がぎゅうぎゅうづめに入れられている。そしてそのビニールの口から妙なものが飛び出していた。

「これは？」

「ああ、コレかあ……。うーん、題名を付けるとしたら……恐怖、人の手のようなゴミ。ってところかなあ……。」

何のひねりも無いなあ。しかし、本当にちよっと見……いや、ずっと見てると逆にますますソレに似ている気がする。

関節、そしてその細長さ、太さ、ゴミ袋の口からはみ出ているその人間の肘から先の手の様なモノは生々しいほどそれらしい形をしていた。しいて言えばその腕の様なものは指にあたる五本の内およそ親指以外の四本が見あたらぬ形をしているように見えた。それ故、まあそれが人間の腕ではない様にも思えた。

実は問題の写メとはこのゴミ箱のゴミ袋とそれから飛び出た異物である。この時はまだ俺の中に悪寒を感じさせ悪夢を見せるような媒体でも無かったその映像だが・・・。

それについて思いもよらない情報が俺達の茶の間に響き渡ったのはセイカが帰ってきてその写メを見せられてから間もなくのことだったのだ。

突然、それまで文庫片手に静かに座っていたコクハがとりあえず程度の意味合いで点けていた部屋の隅のテレビの画面から騒がしいリポーターの大きく張り上げられた実況が聞こえてきたのだ。

《みなさん、ここです。ここがその現場です。見て下さい、この時間になると公園の明かりは各所にある小さな電灯だけでほとんどが暗闇、物音もまったく響かないような開け放たれた空間・・・ここで先ほど、若い女性のものと見られる遺体が無残な状態で発見されたのです。》

俺とセイカは不意にその緊急ニュースに目を向けた。画面の上端に『ゴミ袋の中から死体』と題されたそのニュース。場所はS北沢町と題されている。もしかやこれは、いやいや・・・しかし、その時、俺はTVの情報を本心から疑った。

「ここわたしが行った公園だよ！」  
しかし、そんな俺の期待を裏切るようにセイカが驚愕の声を上げた。そして俺は口を半開きに携帯電話の画像とテレビの中継現場を見比べるはめになった。。

そして俺とセイカそして傍観していたコクハも3人揃ってニュースに釘付けになった。

ニュースの内容ではほんのちよつと前にS北のその公園でゴミ箱

から女性の遺体が発見されたとのこと。偶然、場に居合わせた取材班が一番乗りで手に入れた生放送のスクープである。

TVで映している画面は警察やパトカーに阻まれて問題の場所より少し離れた公園の入り口だったが。それはやはり間違いない残念ながら例の写メの公園に違いなかった。

しばらくして中継は実況リポーターからキャスターに画面が渡され、そしてニュースが専門家の話に入ると俺達は息を吐いて、現実に戻された。

「おい、この画像って？」

「うわ、ホントにスクープをいち早く手に入れてしまっていたみたいだよ、わたしは、コクハっ。」

セイカは混乱しているのか妹にすがりついて”すごいよすごいよ”と興奮していた。コクハはそんな姉をウザそうに突き放す。

「何をする、離せ。まったくおまえはろくな写真を撮ってこないな。不吉な奴め。」

そう、不吉な奴め……。正直、俺はあの手のグロイ代物が苦手だった。あれが本当にその被害者の女性だと思つと気持ちが悪くて仕方ない。きつと今日見た悪夢もこの写メの為に見たに違いないのだ。

ああ、やだやだ、考えただけでも鳥肌が立つ。死体なんて耐えられない。昔から俺は生理的にそう言うのはどうも肌が合わない性分らしいのだ。

キッチンには今朝姉妹達が撮つたであろう朝食の跡がダイニングテーブルに散らかっていた。俺はそれを適当に洗いにまとめると気分直しに出かけることにした。ちょうどよく外は小春日和と言える晴天である。こんな日は特に用事が無くてもブラリと映画館にでも寄りたくなる。むしろ天気を理由にでもないバイト以外で外出など出来ないくらい、俺は半分引きこもりなのだ。

このところ親父にもつかれこれ数十回もメールやら電話やら入れているのだが、残念ながら全て圏外になってしまふという非常事態が発生していた。

どうやらヤツは砂漠でのたれ死んだか、雪山で遭難したか、ジャングルの奥地で原住民にでも喰われてしまったか、はてはナポリのギャングに捕まって今頃は地中海の藻屑と化しているのかも知れない。と、いう冗談は残念ながら外れて今月の仕送りは銀行に振り込まれていたので、おそらくまだ生きてやがることは確かであった。

そいでまた残念なことだが、ヤツと連絡が付かないということは姉妹のことが談判できないでいると言うことであることだ。もしかしてこのままあの二人をずっと面倒見ていかなければいけないのだろうか？ 実に不安だ……。

ところでまたまた残念なことがあった。もちろん姉妹のことだが、あの二人、実は今月（4月）の初めにかけてに隣町の金城というところの進学校に入学をすませやがったのだ。これは意外に重大なことだ。学校を我が家の近所に決めたということはイコール住み着くという方程式に当てはまると言うことである。それはつまり姉妹がこれから少なくとも数年は我が家の住人であるという闇なる告知であると言っても過言ではないと言うことである。さらにコレについても親父の野郎が、3月の時点で入学手続きをすましてやがったのだ。あの野郎完全に姉妹を俺に押しつける算段だったのだ。そう、押しつけるつもりだ。じゃなかったら入学手続きや入学試験を受けさせる前に俺に話しが来るはずだ。それをあんな唐突に置き逃げみたいな真似をしゃがって……。

まったくこれらもろもろには怒り心頭である。そして当人の親父が雲隠れしているので極めつけ俺は……この無気力な性格上すでに諦め始めていたのは否めない事実であった。

その日俺はずいぶん懐かしい中学校以来の友人を思い出すことになった。

月曜日。週3回ある時給のアルバイトが無く、別段朝から暇な俺は嫌な夢を忘れるために出かけていた。

私鉄に乗って渋谷のほうのシネマ通りで午前中に放映されているB級を適当にチョイスするとそのままから空きのホールで片手のポツポツと共に映写機の映し出す虚像と対峙した。

幸いなことに映画はサイコホラーやスプラッターなどそっち方面のものではなかった。それはSFと呼べるものだったと思う。だいぶジュブナイルな内容だったが、B級と呼べるようなつまらないものでもなかった。むしろ俺向きで面白い内容だったし演出やカメラアングルなどもとても完成されていた。そして思想とでも言おうか伝えたいことがしつかりと映像とシナリオに根を張っているのが素晴らしいと思つた。後で知つたことだがその映画は別にB級の安物映画ではなく、小さくても列記とした賞を持った欧州の名画だったらしい。でもその時は他のビルやホールで上映されているB級の名作達の声高な宣伝と見る人を引き込む口説き文句とハードな映像力に色を薄くされ、はたから見るとただの端役映画にしか見えなかったのだ。それに上映時間も午前中からやっているのだから当然そう見えたのだ。映画はどこで宣伝していたわけでもない。客入りも悪かった。

でも少なくとも俺はその映画のおかげで胸を侵食する悪夢の悪寒からどうにか脱出することができた。映画が半ばを終えた頃には俺は悪夢や例の写メのことなどすっかり忘れて感動のストーリーに魅入っていたのだ。

映画を見終わると気分も新しく俺は映画館のあるビルの1フロアのネット喫茶に入って、漫画を読むことにした。新しい漫画や長く連載しているものをちよろつと拝見しようと思つたのである。

しかし、ついでに軽食を二つほど注文して昼飯を済ますと、そのまま青年誌の某剣豪漫画に熱中してしまい気づくと大分長い間読み

ふけてしまっていた。おかげで時間帯料金も3時間分になっちゃった。

うかつだったとダメージを受けた財布の中身を覗きながら店を出て、それから俺は下りの私鉄に乗り家に帰る前にスーパーに寄った。姉妹が家に来てからというもの買い物の回数が倍近くに増えているのだ。ちなみに今日の夕飯はなす味噌いためである。

スーパーで買い物をする。自分で献立を考え自分で買うものを決める。俺がこういう作業を身に着けたのは今思えば母さんが死んでからだった。母さんが死んだのは俺が高校一年の夏のことだった。死因は肺炎である。夏風邪をこじらせてそのままおれて逝ってしまった。病院の診断がどうあれ俺はあれは過労死だったと思ってる。

親父は母さんが死ぬ2年も前に突然「よし、じゃあカナダの方に行ってくる。」と言って俺と母さんを残して旅立った。それもまた珍しいことではなかったので俺も母さんも無言で見送ったのを覚えている。そんな親父は母さんの死の知らせを聞いても案の定すぐには帰ってこなかった。

あの時俺は身寄りのいない母の葬式と通夜を一人でしきって執り行った。それはひとつのけじめのような責任のような謝罪のような気持ちだったし、親父に対する意地のようなあてつけのようなものでもあった気がする。

そんな今となってはどうでもいい古い記憶を掘り起こしながら野菜の棚を歩いていると突然誰かに呼び止められた。

「あれ？マコちゃんじゃないか？」

は？と振り向くとそこには白髪交じりの中年のおっさんが一人、片手を挙げてこっちへ歩いてきていた。

「やあ、久しぶりだなあ。結構背も伸びたなあ、体格もがっしりと良い身体になった。」

おっさんはいやに馴れ馴れしく俺の肩に両手を乗せた。俺はそんなおっさんの顔を数秒見つめるとふつふつと記憶の糸が鮮明につな

がっついていくのを感じた。

「あ、マジで？カイの親父さん！？」

思い出すと思わず指を刺して叫びに近い声を上げてしまっていた。そのおっさんは俺が小学校と中学校の頃の友達の灰原灰の親父だったのだ。

俺とカイの親父はスーパーで再会した後、帰り道が結構一緒の方  
向だったので途中までゆったりとした足取りで懐かしい思い出話  
んかをしながら歩いた。

「そつかあ、漫画家を目指してるのかあ。」

「はい、まあ似合わないといわれたらそれまでですけどね。」

「いやいや、そんなことはないよ、うん。」

「・・・へへ・・・」

灰原灰と俺は小学校一年の頃からの親友だった。俺は昔よくカイ  
の家に遊びに行っていて、この親父さんともよくバスケットをした  
りして遊んでいたのを覚えている。

でもたしか、中学校の中盤辺りからカイは教育熱心な母親の意向  
で塾通いが激しくなり、俺は俺でバカなヤツラと連んで悪さばかり  
していたので、いつのまにかお互いは会わなくなっていた。もち  
ろん高校も俺は工業、カイはどこぞの進学校に行つたからもう完全  
に音信不通である。

だから俺は、今現在カイがどうなっているかなんて想像もつかな  
かった。

「実はあいつはもう6年近く部屋から顔を出してないんだよ。」

カイの親父がらしくない鬨りのある微笑を引きつらせてそういつ  
た。

どうもカイは重度の引きこもりであるらしいのだ。それもその原  
因が厳しい受験を乗り切つて有名大学に入ったが環境に適応できず、  
ある日突然爆発してそのまま引きこもってしまったらしい。部屋の  
ドアは硬く閉ざされ外界の空気を全てシャットダウンしてしまつて  
いるというのだ。

「ここ2・3年は顔どころか声も聞かせてくれんよ。」

「そうですかぁ……じゃあ、あのお袋さんはどうしてるんですか？」

俺がそう訊くとカイの親父は少し眉間にしわを寄せた。

「うん……由紀子はカイが高校の頃に交通事故でね……私が病院に着いたときにはカイは由紀子の亡骸の横で静かに座っていたよ。」

話を訊いて行くところやらカイのお袋はカイが高校生の頃に交通事故でなくなってしまったそうだ。

「そうだ、マコちゃん、こんな事頼むのもなんだけど。今度ちょっとカイの様子を見に来てくれないかい？幼なじみのマコちゃんが来てくれればカイも少しは……。」

と親父さんに言われたとき、正直な話、引きこもるということ自体にはあまり興味が持てなかった。

でもなんというか、まあ、偶然だが俺もカイと同じような年頃に母親を亡くしているし、少し昔のことを思い出すと彼のことを懐かしいと思っ、多少会いたいという気持ちもなかったわけでもなかった。

\*\*\*

ああ、だるい……。

何がだるいつてこんなにだるいことはない。まさかこの歳になつて再びそんな場所に行かなければいけないなくなるなんて、子供でもできないかぎり有り得ないことだったのだが……。

俺は電話の受話器を投げ捨てるように置いてため息をついた。そしておもむろに姉妹のいない白けた部屋を眺めて、また一息大きくため息を吐いた。

訳を話せば俺は、カイの親父と別れて家に帰った後、すぐにその忌々しいベルの音に呼び出しを食らったのである。

「あの、もしもし？空木・・・いえ、琴乃葉さんのお宅でよろしいでしょうか？」

その電話は姉妹の通う中学校の担任の先生からだった。とてつもない美声の持ち主で通りの良い涼風のような声が電話越しからでもその唇の動きさえ感じさせた。

俺は内心、先生の姿形をぼつと想像しながら、話を訊いていくと何やらその先生は姉妹の姉の方、セイカの担任であるそうだった。

「あの私、木村青子と申します。実は今日こうしてお電話をおかけいたしましたのは、セイカさんの髪色についてのことなんです。・・・」

「ああ、はい。」

なるほどその一言で俺は察しがついた。セイカの髪は青色だ。普通の学校、よもや奴らの通っているような学校なら尚更、校則違反ではないか・・・。俺はすっかり学校というモノが規則ばつた場だということ忘れていたようだ。

「我が校では生徒の頭髪は原則として地毛の色で染めたりしてはいけません。」

「はい、分かります。」

「ええ、ですからこちらでは入学当初より何度もセイカさんご自身に指導を行っているのですが、どうもセイカさんは言うことを聞いてくれないんです。」

「ああ・・・そうですか。」

何だ？言うことを聞かないなら聞かせればいいのに、罰でも与えて、と思わないでもないがなんだかアオコという先生の声にはどこか微妙な柔らかさと弱さがあり、あまりいじめないであげたくなくなる気もしたので俺はすなおに話を訊いた。

「ですから、お兄様とは入学式の時もお会い出来ませんでしたので、一度お会いしておくということも兼ねまして、セイカさんが今日はお兄様はお暇だと言いますし、もし良ければ今から学校の方へお越しただけなんでしょうか？当校の教育理念についてもう一度

「ご説明させていただきたいのです。」

「……………」

これには俺もマジだるいという考えが高速で脳裏を巡った。セイカのヤツ。何か企んでるのか？考え過ぎか？だが俺を呼び出すようにし向けてるんだろ？暇だなんて……しかし、くそ……面倒くさい。ただでさえ今帰ってきたばかりで何かする気などおきないというのに……。だがしかし、俺は姉妹の保護者なのだ、そしてたった一人の兄なのだ、とも思うとこのだるさも一定の値までは我慢しなければいけない気もするのだが、自分で自分の嫌いなところだ。

「はあ、わかりました。じゃあ、今からでいいんですね？」

「はい、もう放課後になりましたのでお待ちしております。」  
というのが電話の内容。

受話器を置いてから、しばらく俺はだらんと座っていたが、すつくと起きあがってかつたるいが親父の服から背広とシャツとネクタイを拝借して着替えた。

はつきりいつてだるだるである。だが、まあ、あの声の持ち主である担任の先生に会えるのだと思えば……少しは気も楽になるかも知れない。

俺はそうしてまた再び家のドアを開き出かけることになった。

しかしそれにしても姉妹が入学した進学校の”私立至成学院中等部”とは、また都内でも有名な学校だ。そしてコクハの方はまだしも、よくあのセイカまで入学できたモノだとは少し関心さえした。

それに姉妹は同じ学年、一年生に入学と言うことで、つまり二人は実は双子らしい。どうも双子と言うほど似てないと思ったら一卵性双生児ではなく二卵性双生児だということだ。

まったく、急に妹が二人も出来ることだけでも不自然だが、暮らしていく内にその詳細が少しずつ報されていくのも、なんてこの世

の中はなんてアバウトなんだろうと思う。正直、これから先、どのくらいの間、俺は姉妹と同居し続けなければいけないのだろうか、しつこいようだがまことに不安である。

至成学院中等部。そう題された表札が嵌め込まれた大きな鉄条門には”東門”と褐色の外壁に印字されている。

金城の町の一角を大きく切り取った五つの建造物、それらを取り囲むシックな褐色の背の高い外壁。見るからに厳格そうなその学習施設はある意味、国会議事堂や大使館といったもののような秩序ばった重々しさを醸し出していた。いや、もつと言えば一種の刑務所のような組織的威圧感を備えているように思える。

都内にこれほどの大きな施設を完備し、外からは中を覗くことは不可能というように”東””西””裏”の門以外は正に監獄めいた高い塀で外界との接触を遮断している。そしてこの学校に正門という門はない。

来客者は東門か西門のゲートを窓口で身分証明をして中へ入校するシステムになっている。車、バイクなどの乗り物は裏門から本館（本校舎）の裏手の駐車場に停めることが出来る。だが、俺は徒歩なのでその必要はなかった。

窓口で警備服の中年の男に保険証を渡しコンピュータでセイカとコクハの保護者であることを確認してもらうとゲートを開かれ、中へ入った。

さすがの俺も小さい頃から金城の一角に巨大な学校があることは知っていたし、遠くからでもよく眺めることの出来る大きな建物だったので外見はもう知り尽くしていたが内観を見るのはこれが初めてだった。

外から見た至成学院中等部は四つの校舎の四角い頭が高い外壁から見えるだけで、本当に高級そうな塀に囲まれた刑務所といった装いだっただ。

しかし、中にはいると本館と南校舎（S館）の間に陸上トラックが2個もある巨大なグラウンドが広がっていて、南校舎の東斜め隣

には背の低い平屋の体育館とプールがあり全部で五つの建物が設備されているのだと分かった。

本館の左右には本館より1階分背の低い校舎が二つ。東隣に「東館」西隣には赤褐色の塗装を節々に施された通称「赤館」という西館が噂通りに建造されていた。赤館は噂通りどう見ても他の建物とは異なつた存在であり、噂では超進学級の勉強を教えているのだそうだ。

今は放課後、目の前のグラウンドには野球部やらサッカー部やらが元気よく走り回っていた。

俺はそんな彼等を横目に大学級の巨大な中学校に苦笑いを浮かべながら本館1階の職員室へ向かった。この時には朝から出かけてただるさのことなど考えることも無くなり、ただただ別世界に来たような違和感だけを感じていた。そしてそれ以上に俺にだるさのことを忘れさせた者がある。

と、いつものもセイカの担任の木村青子は電話口での声に負けず劣らず清楚なタイプの美人だったのだ。

なんか茶道の家元のご息女といった品のある美しさで色白。そして髪は黒絹みたいな艶やかさでセミロング。これだけ整つた美しい顔立ちをしていて、スタイルは華奢な感じで女性らしければ、さぞかしおモテになるのではないだろうかと思わせるが、そういうも男がつきまといていそうな下品なイメージもわからないところが、さらにその価値を高めている気がする。

「はじめまして担任の木村です。」

そして何と書いても慎ましやかに片口引きつらすようにした微笑は純白のシルクの様につれがない。

おいおい、さすが有名校。雇用基準はみんなこんなのだろうか？とも思つたがあとでセイカに聞いたところ木村先生は校内でもとびきりの上玉だそうだ。

「兄の真琴です。」

お互いに挨拶をすると俺と、そして頭の後ろで腕を組みながらツ

ンケンした貌をしているセイカは来客室の様な別室に案内されてソファに向かい合って座った。

もちろん俺の横にセイカ、そして俺の向かいに青子先生だ。

青子先生はまず俺に校則を書きつづつた一つの倫理綱領のような本を差し出した。そしてその中の第3条3項にある” 頭髪の脱色及び髪染めの禁止” の項を読み上げる。

” 黒髪を変色させてはいけない。しかし、もしも生まれつき髪色の異なる者はそれを申告し許可を得て登校すること”

なるほど、セイカの場合見るからに青青しいから間違いなく校則違反だな。青い髪の人種なんて聞いたことがない。

「私はセイカさんの為にもこのまま青い髪で世の中に出るのはよく無いことだと思うんです。」

青子先生は言う。

「はあ・・・そうですね。」

俺は頭を掻きながら答えた。どうも真面目な先生というのを目の前にうまくたちい振る舞えない。真面目以前に学校というのがもうすでに苦手なのかも知れないが俺の場合・・・。

青子先生はそんな俺をますます真剣な眼差しで見つめ話す。

「親からもらった髪の色を変えることも親不孝だと思えますが、それ以上にまだ社会に出て責任を持つたり結果を残していない人間が主張だけを押し通せてしまうことは、無責任な世の中を生みます。」

「はい・・・。」

「それをお兄様にも理解してもらって、セイカちゃんに家庭からも正しく教育をしていただきたく思い今日ここにお越しいただいたんです。分かっていただけですか？」

「いや、はい、同感です。」

青子先生は正しそうなことを切に語る。俺も別に学校に規則があるのを忘れていただけでセイカを野放しにしていたつもりもないので、これからは髪を元の色に戻させようとは思った。それに実際こ

の学校の在り方を見て、そんな秩序のない姿勢が許されるわけがないと納得もした。

しかし、そんな俺を横目にセイカは”ム”と眉間にしわを寄せる。「おい、マコト、青子ちゃんに頷いてどうすんだよ！わたしの味方をしなさいよ。そのために呼んだんでしょ！」

「なんだ、おまえ俺がおまえの味方だと思つてたのかあ？」

「なに？違うの！？」

あきれた。どこの世界にこんな破天荒なヤツの味方をしてくれる人間が居るって言うんだ。しかも相手はまっとうなことを言ってる学校の先生で、その上美人なんだぞ！バカらしい。ここは一つビシつと言つてやらねば。

「セイカ、悪いけど今日帰ったらその髪は染め直す。」

「何故！」

セイカは両手を挙げて抗議のポーズ。

しかし俺は断固として退かない。青子先生も頼もしそうに見ている。

「だいたいおまえなんで髪の色にこだわるんだ？そんな青くちや変だろう。」

「何を言つてるの。青くなければ、コクハは黒いんだから。」

「な、そんな理由か？」

「もちろん。そんな理由だよ。」

親指を立てるセイカはまったく正当性の無い主張を平然と胸を張つて言う。俺は呆れて顔を片手で覆った。

つまりこういうことか。

セイカは青でコクハは黒。それをはっきりと主張しておきたいということだろう。普段着もそう言う理由で青いものを好んで着ていたのか……。それなのに学校ではブラウンの制服。尚更、青を主張しなくてはいけないというわけか……。

「わかった。じゃあ、こうしよう。青い髪留めかなんかを髪に付ければいいんだ。そうすればなにも髪自体を青く染めなくても充分

青いだろ。いや、むしろ青いことを主張するなら、それぐらいさりげないほうがかえって際立つもんだぞ。」

そう言うときイカはピンっと頬を緩めて「なるほど」と呟いた。

「たまには良いこと言うじゃないか、マコト。」

たまには、は余計だ。しかし、本当にこんなくだらないことでいいことで俺をここまで呼んだのかコイツは……。まったく呆れるな……。しかしこれで済んだ。

「よし、じゃあ、今度からは髪留めか何かをする。これで解決だな。髪の色は黒く染めるんだ。いいね、セイカ。」

「ふむ、そうだな。何事も妥協は必要だ。わたしとしても青子ちゃんとこれ以上争っても何のメリットも無いんだよ。だからまあこの辺で手を打とうか。」

そう言うときイカは青子先生に笑いかけた。青子先生は「よかったです」と一言。

「そうか……。しかし、先生のことは先生と呼びなさい。」

俺はぬかりなく注意。しかしセイカはニタリ笑い。

「まあ、固いことは言うなよ。」

固くない固くない。まったくコイツは。

それからしばらく俺は青子先生と学校でのセイカのこと。成績、そして他のクラスだがコクハのことも少し話して、帰り際。

「あの、ありがとうございます。」

青子先生はセイカが早足に前を行くのを見て、俺の後ろから小声で礼を言った。

「私、実はまだ去年教師になったばかりの新米で、それで担任を受け持って、どう生徒と接していいか分からなかったんです。だからセイカちゃんみたいに元気で、ちょっと不思議な子はどうしようって思っちゃって……。」

青子先生は実に教育熱心な先生のように眉をひそめて、ホッと一息ついた。

「本当にありがとうございます。」

そしてもう一度深く頭を下げた。

「いやいや、こつちこそ妹をよろしくお願いします。」

俺は片手を左右に振って笑いかけた。すると青子先生も綺麗な笑顔を浮かべた。

こんな先生なら俺ももう一度、中学生活に戻りたいと思わないでもなかった。

学校から出るともうずいぶん日が沈んでいた。青子先生も六時前には学校を出て帰るということで、S北沢に住んでいるから金城の駅までは俺たちと一緒に帰ることになった。

帰り道、青子先生と俺たちはいくつかの話をした。

青子先生は音大出の音楽の担当教諭でセイカのいる一年生B組の担任であること、彼女はまだ去年教師になったばかりの新任の担任であること、それにこれは少し物騒な話だが、最近学校付近で不審者が目撃されているらしいとのこと。

生徒には今朝プリントで知らされているが、なんでも0時を過ぎると金城の住宅街を徘徊している、黒いパーカーを着てフードを深くかぶった男で、最近では巡回中の警官が道端で発見して職質をかけようとして逃げられ追いかけあいになったとか。その時は警官がどじだから取り逃がしてしまったらしい。

最近ちまたじゃ、ゴミ箱死体遺棄事件についてマスコミが通り魔の疑いなどと報道したため人々はどことなく不安がっている。だからか、その不審者のことも俺はちよつとぞつとしない話に感じた。

だってそうだろ？ゴミ箱の事件があった場所とこの金城は私鉄で急行なら二駅、各駅でも七駅、距離にしておよそ6キロも離れていないのだから。その殺人鬼がもしかするとこの金城の方まで次の餌を物色しにきているのかもしれない、とそんな風にも嫌な思考が廻るのだ。

俺たちはそんな会話をしているうちに金城の駅前を通った。そこで青子先生は「では、私はこれで。」ペコリと頭を下げて駅のホー

ムへ後姿を歩かせた。なにやら青子先生はこの後、大学の友人の通夜に参列するそうだ。

青子先生がホームに消えるのを見送ると俺とセイカは並んで金城の隣町の生駒町にある我が家へと帰った。

帰る途中、セイカにコクハはもう帰ったのかと訊くと、授業数はセイカのクラスよりコクハのクラスのほうが一時間ほど長いが、今頃はもう家に帰っているとの事だった。

/ 2

「これは再犯の確率が高いね。またやるよコイツ。」  
セイカが食卓のテレビを見ながら競馬の予想をするような軽口で言いはなつた。

TVでは相も変わらず例のゴミ箱死体遺棄事件の報道が繰り返されていた。犯人は関係者なのか？それともただの変質者なのか？そんな問答が専門家たちスタジオを賑わせていた。

俺はこうしてこの事件のニュースを聞くとどうしたってセイカの撮ってきた携帯電話の画像を思い出す。

奇妙に晴れ渡った公園。若葉の息吹く木立、白く太陽に照らされる砂地、木々の木陰の涼しげな翳り、子供達の無邪気な映像。そして青いベンチ、その横の一個のバケツ型の鉄網製のゴミ箱。ただ一つのその存在がそんな自然な風景を奇妙な物に変えていた。

それはバケツ型のゴミ箱に詰められた大きな黒いビニール袋だった。たぶんごみ捨てようのビニール袋。たぶん近くのスーパーにいくらでも売っている何の変哲も無い、でも、そのビニール袋の口からは何かが見出していて、ソレがあの時俺には本来あってはならないもののように見えたのだ。そして実際、それは人間だったものの腕だった部位に他ならなかったのだらう。

そう思うと未だにぞっとする。女々しいと思うかも知れないが、俺はこんな性格にもかかわらずどうしても死という形だけは昔から・

・怖いのだ。

「この間から出てるっていう不審者、あれもしかしてヤツなんじゃないのかな？」

俺が思わず嫌な映像を呼び起こしているとセイカがまた不吉なことを言い出した。

不審者というのは今日帰りに青子先生から聞いたその不審者のことだろう。そしてヤツというのはもちろん殺人鬼のことだろう。

「だからさあ、きつと次の獲物を探してるんだよ。」

セイカは続ける、俺はそれを否定しようと反論をした。

「でもまだ、こいつが無差別な殺人鬼ときまつたわけじゃないだろ？」

「なにいつてんの。わざわざ殺した死体をゴミ袋に包んで現場のゴミ箱に捨てるようなヤツが変態じゃないわけじゃないでしょう。人間一人をゴミ袋に詰めてゴミ箱まで持って行って投げ入れるのだから現場で出来る度胸もおかしいし、隠蔽するために袋に入れたならもつと見つからない場所に廃棄するはずでしょう。」

セイカはそう俺の反論を切り払ってサンマを一切れ口の中に放り込んだ。そして片手の茶碗からつぎにご飯を口に放り込む。俺は正反対に食事に手をかける気力を失っていた。

「じゃあ、仮にそいつが人をゴミ箱に捨てる変態だとしても、それがどうして黒いフードの不審者と繋がるんだよ？関係ないだろ。きつと。」

少し願う口調だったかも知れない。俺がそう言つと、しかし次の瞬間それまで黙々と丁寧な箸裁きで食事をとっていたコクハが口を開いた。

「ちよつと黙れ。」

そう告げるコクハの視線の先にはTVが写っていた。テレビ画面にはゴミ箱死体遺棄事件の被害者の”島田響子”の顔写真と名前が生々しく掲載されている。

放送内容は被害者の親族の無念と被害者の生い立ちについて簡単

に語っていた。島田響子は都内の音大を卒業しピアニストの夢を持っていたそうだ。それと死体の指がなかったのは生前の怪我が原因でありこの事件との直接的な関係はないそうだった。

報道が終わると、コクハが疑問そうに「指・・・」と呟いて、また何もかも無かったように食事を黙々と始めた。

セイカはそんな妹を一瞥して「ふむ、指・・・ねえ」と呟いてこっちはやっと黙って食事の仕上げに取り掛かった。

俺は思う。ここまで姉妹といくら同居してわかったことだが、この二人は外見もさることながら性格もまったく別物である。もっと言ってしまうえばこれは正反対の双子なのでは無いかと思う。

セイカの性格は明朗快活、猪突猛進、例えそれがどんなに汚く恐ろしいものでも興味と冒険心が先走ってしまうような、そんな塞ぎどころの無いブレーキのゆるいエンジンのようなところがある。

かわってコクハは冷静沈着、頭脳明晰、しかし人見知りが激しく何かを取り扱うような決壊的な変化が嫌い人間関係も好きではないらしい。何か長いものには巻かれる的な考えも非常に強いようでそこから辺諦めはいらしい。

うるさくて手のつけようが無いセイカと比べてコクハはおとなしくて助かるが、それも接触しなければの話である。もしも誤って一度でもコクハ自身の内面に触れようともすれば信じられないくらいの拒絶をしめされるのだ。

実はこの前一度、俺はコクハに読んでいる文庫本について訊ねてみたことがあるのだが。

その時俺はセイカとはすぐによく喋る仲になったもののコクハとは一切口もきいた事が無いので、一緒に暮らしているのだから少しぐらいは、と思ひ話しかけたのだ。

しかし、コクハは俺が「いつも何読んでるんだ？」と言ひ終らない内に「消える、邪魔だ、あっち行け」の三語を言い放ちこちらを向きもしないで俺を排除した。

はつきり言っただけでそこまで完膚なきまでに端から拒絶されたので

は誰もがもう話しかける気にはなれないだろう。コクハとは一見はきれいな一厘の花だが、触れればたちまちそれは棘つきの茨のような少女なのだ。

と、いうこともあつて俺は今さっきTVを見て「指……。」と呟いたコクハにそれについて訊いてみる気にはなれなかった。それ以上にたぶん、俺はこの事件に少しでもかかわりたいとは思わない。なぜだろうかは知らない。ただ人間の死体というものが少しでも自分の人生に寄り添ってはならないもののように思っている気がする。そんな気がして、ならないのだ。

\*\*\*

「なんだ！学校の近くじゃん。」

俺の家から徒歩十五分の金城の駅。そこから徒歩で約5分、閑静な住宅街に行く広い通りでセイカが今さらのように呆けた声で叫びを上げた。

「そうだよ。だから何度も言わせるな。」

「なに？マコト。お前の友達は金持ちのぼんぼんなわけか？」

「さあ、どうだろうなあ、中の上ぐらいはいつてるのかもな。」

俺は半ばその場しのぎの心のこもってない回答を返して、その心はずでに古い記憶の中に居た。

生駒町の我が家から坂を上がって広がる街、金城の一部一等地に築かれた住宅街。そこは都内でも三本の指に入る高級住宅街であり、俺は昔この場所へよく遊びに来ていた。

周りにある家々には必ずといっていいほど大きな車庫が設けられ、邸宅のほうはどれもが3階建てやら何やらとツボ平均60は越えているような家屋が立ち並ぶ。軒先には色鮮やかなガーデニングが顔を覗かせ、きれいな小さな森の広場のような庭園がいくつも見受けられた。快晴の空に笑いかけるような道々はごみ一つ落ちてなく、昼間から静まり返り、ここが都内の一地域とは思わせない。

そんな澄み切った静かな住宅街に俺が最後に訪れたのは、もう10年以上も前のことだった。だからか、にわかには俺はこの住宅街に少しの不安を覚えた。

角を曲がればあるはずの豪邸は二件の新築住宅に変わっていたり、いつも目印にしていた赤い風見鶏も見当たらない。時々、記憶の中そのままの姿を呈すケーキ屋などを見つけてほっとして、そうして気がついてみてあたりをよく見回せば、俺は10数年という年月がどれだけ大きいものなのか気がつくしだいだった。

その場所はもう俺の知っているソコではないのだった。

「ここら辺も変わったなあ」傷心気味にそう呟くとセイカが「まあ、10年以上も経つと男だつて女に変わるもんでしよう」と意味のわからない言葉を返してきた。まあ、当然突っ込む気はしないのでスルーである。

そうしてあの家もその家もあの竹林もこの公園もなどと思っっているうちに俺たちは目的の場所までたどり着いていた。

俺とセイカが足を止めたのは、一軒の何の変哲も無い大き目の箱型住宅の前だった。

2階建て横幅も奥行きも広いここら辺では平均的な一軒家。玄関先から石畳を伝って門の前には「灰原」という立て札が門柱に嵌め込まれていた。

そう、この日俺が訪れたのは、中学時代までの親友の灰原灰の家だった。この前スーパーで偶然、カイの父親と会い、説得とは言わないが息子の様子を診に着てほしいと頼まれたのだ。で、なぜそれなのに俺の横に何の関係も無い奴がうるちよろしてるのかということ。。。。

「おい、セイカあんまり変なことするなよ。」

なぜか灰原家の塀をよじ登ろうとしていたセイカを見て俺は苛立つというよりあきれた感じでいった。

「変？なにが。」

「おい、ほんとに変なことすると今からでも家に帰らせるからな。」

「しらばっくれるセイカに俺は少し本気で言つとセイカは仕方なしという感じで「あいお！」と答え、しぶしぶ戻ってきた。それでなくても特別につれてきたんだから。これ以上変なことは絶対に許さない。俺は目でそうセイカに伝えた。」

しかし、なぜこんな奴をつれてきたかつて？それはもちろん。

こいつが勝手についてきただけである。

灰原家の門前でインターホンを鳴らすと数秒もしないうちに応答が帰ってきた。

「はい、灰原ですけど。どちらさんですか？」

少し鼻についた綺麗なアルトの声がインターホンから帰ってきた。少年のような少女のような声である。喋り方からすると少年かもしれないと俺は思った。灰の弟だろう。

「あの、琴乃葉です。先日親父さんと約束したので来ました。」

「ああ、その話しかあ、わかつたまつて、親父呼んでくる。」  
そうしてガチャンと勢いよく連絡は途切れてしばらくすると灰原家の門戸の石畳の向こうの玄関が勢いよく開かれた。

「どうぞ。入って。」

玄関を開いたのは一人の少女だった。靴もはかないで玄関から上半身をドアノブで支えるようにしてドアを開けている。靴下を汚さないためにそうしているのだろう。

濃く艶のある黒髪のショートカットでボーイッシュだが目鼻立ちの整った目つきの鋭い少女で、その声はインターホンの少年と酷似していた。おそらく少年は少女だったらしい。

「あつ……。」

俺がいそいそと門を抜けて玄関に向かおうとするとセイカが何か気づいたように声を上げた。すると反対側で玄関からはその少年のような少女も「……あ……。」と呟きをもらした。

「おまえ知ってるぞ。」

セイカが少年のような少女に言った。すると少年のような少女は

つまらなそうな顔をした。

「ああ、琴乃葉って家に住んでるっていつてたなあ。・・・おまえバカなほうの空木だろ。」

「な、なんという、暴言をしれつと・・・おまえねえ、バカをなめるなよっ」

そうして二人はにらみ合う。俺はひとまず意味がわからずとりあえずは二人の間で立ち尽くした。

\*\*\*

どうやら少年のような少女の正体は姉妹の通う中学校の同級生でコクハと同じDクラスらしかった。

名前は灰原浅葱。灰原灰の3人いる兄弟のうちたった一人の妹である。俺の記憶が正しければ俺は彼女がこの世に生まれ出でるとき外界での騒ぎようをリアルタイムで見っていた人間である。彼女が1歳か2歳ぐらいまでの成長を俺は知っている気がするの少し恐ろしかった。

「ずいぶんと大きくなりましたね。」と俺がカイの親父に言うとカイの親父は苦笑いで「男ばかりで育てたからコイツも困ったことに男らしく育ちましたんで。」いまや家で一番の荒くれ者だと嘆いた。

カイの家は死んだお袋さんを入れて全員で計6人家族である。だがおふくろさんがなくなつてからは5人家族になっている。それでも十分にぎやかだが、俺が知っているカイの家はカイの年の離れた兄弟達は皆まだ赤ん坊か小学校に入ったか入ってないかという年の子達ばかりで、今と変わりなくぎやかな家族だったか、と言われれば少しは言語は明瞭にはなつたと思う。

さつき客室に通される前に次男の高校3年生と会ったが彼でさえ俺のことはうる覚えだったところを見ると他の二人は俺のことなんてまったく覚えてはいないだろう。

この一番上の次男でさえカイより6つ下という兄弟は俺が昔この家に通ってた頃はただ意味も無く騒がしいだけだった。今はまた意味の理解できる範囲ではあれやはりにぎやかなことには変わらない。さつきも一番下のアサギが3つ上の兄に冷蔵庫の自分の分のアイスを食べられたとかで怒り狂っていた。

昔俺はカイの親父みたいな父親もうらやましかったが、それだけでなく兄弟がいて賑やかなことにもうらやましいと思ったことがあるのを今さら思い出す。ただ、少しの重要な違和感が今ここにはある。昔とは違うそれは……。

居るはずの人間が二人いない。この感じはぬぐえるはずが無かった。

まず、死んだお袋さんがいない。そして幼なじみの姿も、無かった。

ここに来るまで半信半疑だったところがまだあったのか。俺は騒がしい兄弟達を見て、やっと状況を信じるしかなかった。

まさかあいつが引きこもるなんて……。

「カイは……部屋ですか？」

俺は今さらのように訊ねた。するとカイの親父は俺の向かいに座りながらコクリと天井を目で指して頷いた。そこは十余年前、カイが使ってた部屋がある方だった。

「カイの部屋は昔と同じ二階の奥なんですな……。」

「ああ、そうだね。ここ6年はアソコだけがこの家では未知の空間だよ。」

訊くとカイの親父はため息混じりに答えた。

「誰もカイにあったり部屋に入ったりしてないんですか？」

「うん、第一無理だ、3年近く前からアイツは声すら聞かせてくれなくなっただし、部屋に入ろうにも鍵がかかっているからね。その鍵ももちろんアイツの部屋の中だ。それに無理に入ろうなんてしたらあの子は……。」

「そうっすか……。」

俺は親父さんに連れられてカイの部屋の前まで来た。

カイの部屋の前の廊下は十余年前と変わりの無い姿でカイの部屋のドアを見せてくれた。ただその扉は頑なに口を閉じていた。

「カイは、この中に……。」  
扉に手を当てて眉をひそめる親父さんを横目に俺は確かめるように訊いた。

「うん、もう何年も声すら聴いてないが、食事はここに置いておけば次の日には食べられた皿が同じように出されてあるから……存在を感じることはかろうじてできている感じさ。」

親父さんは諦観めいた口調でそう言っただけのため息を小さく漏らした。とそこへセイカがドタバタとやってきた。さっきまでアサギに家の中を案内されていたはずだが。

「ねね」

セイカは親父さんの肘をツンツンと人差し指でノックする。

「ん、なんだい？」

「最近屋根の修理でもしたの？」

妙な質問だった。親父さんもはてな？と顔を緩めて「……いや、どうして？」

と不思議そうに訊き返した。

しかし、セイカはうんうんと数回頷いてからニツと怪しく笑って

「ん、なるほどOK、気にしないで。」とだけ答える。

「おい、セイカ大人しくしてろって言っただろ。」

俺は気がついたように注意した。だいたいコイツこっちに上がってくるなど言っておいたのに。

「なんで？ちよつと気になることがあったから訊きに來ただけでしょう。」

セイカはツンと桃色の唇を尖らせてふてぶてしく踵を返して下の

階へ戻っていった。

「なんだ・・・アイツ。」

相変わらず何を考えているのかわからない奴である。屋根の修理？どついう意味だ？ま、気にすることも無いか。

「なんか、すみません。奔放なヤツで。」

真面目な話しに水を差したようで俺は親父さんに謝ると親父さんは「いや、セイカちゃんは元気がいいから逆にこつちが助かるよ。うちの娘と仲良くしてやって欲しいよ。」と言ってくれた。

「それじゃ、マコちゃん。よろしくお願いするよ。俺は下にいるからさ。」

親父さんはセイカが去ったあとすぐにそう言ってその場を離れた。

引きこもりとはなまけ者とは違う。れっきとした精神疾患であり、それは病である。なんらかの外界との衝突で本人のメンタルに根強いトラウマが植え付けられ、それが引きこもる原因を誘発する。引きこもりとはとどのつまり「逃避行動」の一つに過ぎない。それは「防御的なヒステリー」と言って良い。

と今日ここに来る前にコクハが面倒くさそうに教えてくれた。

正直な話よくわからんというのが率直な俺の感想だった。

引きこもり特有のその「外に出るのが怖い」とか「人間不信」とかそういうものは俺にはよく分からない。理解できないというか、俺だったら何もかも面倒くさくて外に出ないってことはあっても出たくても出れないなんて感覚は想像できないし、出たいという自分が居て、でも出れないなんておかしいじゃないか？出ようと思ったら出るし、出たくないと思っただら出ない。その精神病というかなんというかそういう類の病気は俺から言わせれば矛盾の塊だ。

俺は今までもこれから自分も思うように、自分が自分の行きたいという道を進むつもりだし、それなら尚更自分が自分自身に阻まれるようなことがあるなんて信じられない話だ。

それでも実際に古い友達がこうして扉の向こうで出れないでいる

という現実には真実だから、まあ、俺もそう頭ごなしに否定する気もないわけだが……。

俺は目の前の旧友の部屋のドアをノックする。

コンコン、と歯切れのいい音をならして「久しぶり。マコトだけど……。」と部屋の外から声をかけた。

それから数秒、俺は返事を当然のように待ったが、残念ながら一言も帰っては来なかった。

けどどしかたない。相手は6年間も引きこもってるベテランだ。そう簡単に声を拝めると思えるほど俺も樂觀主義者ではない。

しょうがないから俺は最近の自分の話とか、好きな食べ物のこととかどうでもいいようなことを話した。というか正直、6年間も引きこもってる相手に何を話しかければいいのか分からなかったのがほとんどだ。

しかし、結局それではカイの声を聞くことはできなかった。

その日、数時間ねばって外が夕日の色に染まってきた頃、俺は引き上げることにした。

セイカを呼ぶ。そして親父さんに「また来ます」と告げる。親父さんは苦笑もせず笑顔で「今日はありがとうな。」と言った。

帰りにセイカが収穫があったとか意味の分からないことを言っ、ティッシュに包んだ数本の茶色い長くストレートな毛を見せてきた。

俺はそんな意味不明なことに付き合う気もなく「そうか……。」とだけ答えて帰り道を行った。

カイの部屋の前から帰る道までの経緯で俺はまともに人の話しを聞いてなかったとおもっ。ただずっと「なんだかなあ……。」とだけ思っていた。正直、俺が今まで思ってたよりは深刻な問題なんだなあ、と思う次第である。

それから何度も暇さえあれば俺は灰原家に通った。

そしてあの部屋の前で一人独白のようにドアに向かって話しかけ続けた。

それは日常のどうでもいいことや、カイと会わなくなっただけの俺のこと。母親が死んだこと。それから昔の思い出。親父さんやカイと一緒に都外の森林まで虫取りにいったことや、キャンプをしたこと。色々な話しをした。

そして時にはカイに、といってもその部屋のドアに向かってだが、「おまえの方はどうだった？」とか質問をあびせてみた。

でも当然、返事が返ってくることはなかった。

そういえばこの数度の訪問にセイカは必ずといっていいほどついてきた。アサギともずいぶん仲がよくなっただけで、まあ、めでたいことではあるのだが、一つ気になることがある。

アイツはなにやら灰原家に連れて行くたびにどうも探検と称して何かを探るような行動を見せたり、妙なものを拾ってはもって帰っているのだ。

たとえば灰原家の裏庭に向かって突き出た一階部分の風呂場の屋根の一部の決まった場所に汚れがあると、その汚れの下の裏庭の地面にくぼんだ部分があると、二階の廊下付近に時々茶色い髪の毛のような毛が落ちていたりとか、どうでもいいことのように思われるがセイカはそれらのことに非常に興味深く観察をしていた。

そしてこんな風に最近は俺とセイカは灰原家に一緒にいていたせいかな食事中の会話にも灰原家のことが出るのは必然だった。

「アサギんちってみんなすごい髪質いいよな。」

セイカが肉詰めピーマンを丸ごとほおばりながら傍らのコクハに向って言った。

「なぜ私に言う？」

コクハは肉詰めピーマンを器用に箸で肉とピーマンの皮とに分けて肉のほうだけを食べながら辛らつな横目で姉に言葉を返した。

するとセイカはふつとせせら笑うように微笑をたたえる。

「いんや、別にお前の枝毛をののしってるわけではないよ。邪推はよくないよコクハ。私はただアサギの髪の色艶やかさに遺伝的な陰謀があると言いたいだけなんだよ。」

「……言っておくが。頭髪とは元々頭部を保護したり日射から守つたりと脳を気遣う肉体のシステムの一環に過ぎない。それだったら艶があろうと絹糸のようにしなやかだろつと、そんなもの弾力があつて保温効果がある枝毛のほうが生物的に優れているんだからな。」

「うん、そうかもねえ。でもそれも下等生物的に言つたほうがニュアンスはあうけどな。」

この切り返しで一触即発である。姉妹は互いを睨み付ける。セイカはあえて挑発的にかかつて来いとばかりに口元を吊り上げ、コクハは眉間にしわを寄せ眉を吊り上げる、その顔はまぶたが眠そうに半開きなのにキツとにらみつけてる眉毛との微妙なバランスが少しこっけいで可愛いくらいだったが、ここは笑うわけにもいかない。俺はとりあえず話をそらそうと口火を切った。

「あ、そうだった！」

「ん？なんだよ。」

セイカがケロッツと顔色を変えて反応した。

「えつと……あ、そうだ。黒髪の人より茶髪の人のほうが物腰が柔らかく見えるのは俺だけかなあ？……て思つてさ。」

「何を急に言い出すかと思えば……あたりまえでしょう。色の心理効果的に言えば茶より黒のほうが彩度が無く明度も無い。黒は高級感や闇といった神秘的だったりダークなイメージが目立つけど、茶系色は一般的に親しみやすさがあつて木や美味な食べ物といったイメージの生活に暖かい暖色系なんだからね。」

「は……なるほど、そうでしたか。」

これは意外にまともな答えが返つてきてなんでもいいから言つてみただけなのに、俺は教え諭されて妙に腑に落ちないきもした。が、

まあ、喧嘩になるところをつまい具合に話をそらせたのだからよしとするほか無い。

「あ、そういえばさあ。物腰が柔らかいで思い出したんだけど。」  
セイカが言った。

「灰原灰のところの前に心理カウンセラーが通ってたんだよ。ちようど今のお前みたいに週に数回のペースでドアの外から呼びかけたり話したりとかしてたらしい。」

「アサギちゃんから訊いたのか？」

「うん、結構、物腰柔らかかなハーフの男だったってさ。」

「ふーん。なんで今は居ないんだ？」

「それが一年くらい前に突然来なくなって派遣されてきた病院に問い合わせたら出勤してないってさ。」

「それって姿をくらましたってこと？」

「うん。突然ね。」

なんだカウンセラーが行方知らずになるなんてミイラ取りがミイラになるみたいな話だなあ。

「おい、うつけもの。」

コクハが突如、口を挟んだ。さっきまで食事を取っていたかと思うといつの間にか皿には緑色の野菜だけがちよこんと残り、コクハ自身は推理小説に視線を送ったままである。

「ん？なんだい枝毛野郎。」

そんな双子の妹に姉はまた挑発的な言葉を返すが、妹はまるでそれには反応せず、まだ小説に視線を向けたまま口だけを開いた。それも妙な質問だった。

「アサギの家は全員黒髪でおっけだったな。」

というのはどういう意味だろうか？そしてセイカはその意味を理解しているかのように平然と「ん、そそ、おっけだ。」と答えていた。まったくこの姉妹の会話は時々意味不明である。

「また出たつてさ。」  
夕飯の食卓でセイカが口火を切ったので俺は当然「なにが？」と答えた。

「不審者だよ。ほらこの前学校に来たとき青子ちゃんから聞いたでしょう。」

ああ、あの黒いフードの警官に追い回されたっていうヤツか……。

そういえばゴミ箱死体遺棄事件の犯人は未だ捕まっていない。そう思うと不審者なんて話しもあり考えてたくも無いので俺はそれ以降その話に返答を返さなかった。

どうも嫌な予感がしてならなかった。

次の日、俺はいつもどおりカイの家へ行った。もちろんセイカを連れ添ってである。

親父さんは仕事なので俺は次男に挨拶をしてお袋さんの仏壇に線香をあげるとそのままカイの部屋へ向かった。

そこでいつもどおりドアに向かって話しかける。今日は少し中学校の頃の話も多くした……。

何個かの思い出を一人ドアに向かって喋った後、最後に俺は切り出した。

「俺バカだからよく分かんないけど考えてみた。それで分かったんだ。カイさあ、おまえ出なくていいと思うよ。世の中確かに嫌なことばっかだしさあ……。正直、胸くそ悪い事件もしよっちゅうだし、そういうのが全部嫌になっただんなら出なくていいと思う。」

俺は一人で誰か居るのかも分からない開かずの部屋に向かってこんなにぶつちやけた話するのは正直、恥ずかしかった。それでもなんだろう……。一人だから独白のようにこっぴどく本音を話すのも悪くないのかもという思いもあった気がする。

「でもさ、もしもさあ、嫌なことばかりの世の中でもさ。これさ

えあればいいかも、って思えたらさ。他の怖いこと全部帳消しにしちゃうようなことが見つかったらさ。

出て、来いよな。待ってるからさ。」

俺は言い終わった後、十分ほどして今日はもう切り上げようと立ち上がるうとした。でもその時、ドンツと何かが壁を叩く音が聞こえた。

カイの部屋のドアの横の方、白い塗装の厚い壁からだった。俺はふと気がついて「おい？カイ、聞いてるか？元気か？喋れないか？」と焦ったように言葉を浴びせてドアに耳を押し当てた。必死で幼なじみの返事を期待した。

でもその音以来、やはりカイの返事を聞くことは出来なかった。でもそれでも俺はその時、少し救われたような気がした。たぶん会話が成立したような予感がしたからだった。

俺はその後、また十分ほどそうして耳をドアに当ててた後、しかたない、帰ろう、と思い1階へと向かった・・・。

1階ではセイカとアサギが珍しく動き回らずに二人でリビングのソファで話していた。

「かつてに食べ物が無くなるわけ無いでしょう。」

「でも現になくなってるとるんだよ。」

「それ、いつから？」

「うーん、ここ一ヶ月くらいかなあ・・・。」

「ふーん、一ヶ月かあ。」

二人はそんな会話をしていた。俺には関係ない。

「おい、セイカ、帰るぞ。」

だから俺はその二人の会話に混ざることもなくセイカをリビングのドアの前からよんだ。セイカは「おう、もうそんな時間か。」と言って立ち上がる。

「じゃ、親父さんよろしくね。」

アサギと同じくリビングでTVを見ていた次男に軽く挨拶をして



た。

そしてセイカは続けてこんなことを言い放った。

「おい、これからちよつと出かけるぞ。」

「は？唐突だなあ・・・。」

相変わらず主語や趣旨がまったく遅れて着いてくる会話を作るプ  
口のようにだ。

「悪いけど、俺疲れたから寝るは。」

俺は素っ気なく言葉を返した。するとセイカは首を振って「ダメ  
ダメ、今日はわたし達が夕飯とかつくつてやるからさ、すごく重要  
なことだから、着いてきてよ。大人がいなきゃ話になんないんだよ。」

「ん？」

どういう意味だろう？

「おい、いったい何所に連れて行く気だ？」

俺は詮索と言うまでもなく当然聞き返した。するとまた意味の分  
からない場所がセイカの口から飛び出した。そしてそれは妙に長い  
名前だった。

こうして俺はセイカと共にその「ノ工学心会医科大学付属、ソエ  
ル記念病院」にこの日初めて行くことになった。

\*\*\*

「突然ですが、今日は家庭訪問があります！」

とまったくの唐突にその日ソイツは帰ってくるかと大口を開けた。

「な、なんだ突然、え？ソレまじめ？」

「まじめだねえ。マジだねえ。いやさあ・・・。」

ソイツつまりセイカは茶の間にそのままカバンを投げ捨てるふ  
てぶてしく座った。

「青子ちゃんがさあ。また突拍子もないことに思いつきで打ち出  
した企画なんだよ。他のクラスじゃ、やってないしウチのクラスだ

け。」

「なんだかなあ・・・と吐息をセイカはもらして天井を仰いだ。どうやら本当のことを言ってるらしい・・・。実にめんどくさい話だ。」

「マジなのか・・・。で、なんで今日？」  
「いや、ウチだけ早いんだよ。わたしがさ、今日にしてくれって言ったんだ。」

おい！俺は一瞬耳を疑った。

「な、なんで？」

「ん？やるなら早いほうがいいじゃん。てゆうか今日ならおもしろいテレビもやってないし、時間潰されてもいいもん。」

「なんと・・・。」  
「自分本意なやつめ・・・。」  
「で、いつ来るの？」

「もうすぐだよお。」

「げ・・・。」

「だって青子ちゃん基本的に夕方以降はNGな人だもん。学校だつて六時前には下校してるよ、いつつも。」

「なんだ・・・？」  
「ずいぶん帰るのが早いんだなあ、教師つて。ちよつと気になるなあ。それにしても・・・まあ、どうでもいいけど、また唐突だなあ・・・。」

「まま、ちやちやつと終わらせようじゃないか。」

それから一時間、午後四時半にまずコクハが帰ってきて、それからしばらくして青子先生はやってきた。

「こんにちはあ。すみません唐突にお邪魔することになりました・・・。」

「いえいえ、すみません。どうぞ上がってください。」

青子先生が来て俺とセイカは茶の間の席についた。

「コクハは？」とセイカに訊くと「なんで？アイツ別のクラスじゃないか？」とだけ答えた。

別のクラスだと先生が家庭訪問に来て関係ないモノなのか？そ

うか、そう言うモノなのか？俺は、ま、確かに担任によって教育方針とか色々違いがあるだろうからソレでいいのかも知れないとも思った。それにコクハのクラスは赤館で有名なDクラスだしなあ。

セイカは相変わらず青子先生のことを友達のように青子ちゃんと呼んでいた。これもよく考えれば、自分自身学校に通ってた頃は教師のことを呼び捨てにしたりしたことが多々あったのでそう責められることでは無いのかも知れない。

青子先生は前に俺に新米の教師だから分からないことがいっぱいで大変だと漏らしたが、俺から言わせればついこの間突然決まった超新米の保護者よりは幾分かマシだ。正直、保護者ってガラじゃないよなあ・・・とつくづく思う。

俺はそんな微妙なとまどいと違和感の中でなんとか、セイカの実力判断テストの成績や授業態度などもろもろのこの問答をさばいた。始終セイカにフォローはされたがなんとかやってやれないこともなかった。

要するに頷いて謝って楽しく話せばいいのだ。

そう言う意味では青子先生は非常に協力的な教師だった。

年齢も実は同い年で話しやすいし、終始笑顔を絶やさない人だし、少々ふざけてたり間違っても笑って見過ごしてくれるし、何より、美人だ。

正直な話、惚れたなあと思わないでもない。こんなこといって言うのもなんなんだが別段面食いじゃない。とゆうか青子先生の姿形は今までの俺の路線とはかけ離れてる。今まではどつちかというもつとギャル系路線の娘としか付き合ったことなかったし、まあ、それも好きで付き合ってたわけでもなかったかかも知れないが、こういうタイプは初めてなのに変わりはなかった。

なんというか、この青子という先生はどことなく神秘的なのだ。ただ清楚とか大人しいとか大和撫子のな雰囲気だけじゃなく、どこか謎めいたところがある気がしてならない。たぶん俺はそこに惹かれてるんじゃないかと直感的に思うのだ。

その日、そうして青子先生の家庭訪問の時間はあっという間に過ぎ、五時ちょうどぐらいに「あ、もうこんな時間っ」と少し焦った感じで青子先生が帰宅を告げることによって終了した。

俺とセイカは玄関まで青子先生を送り、コクハもその時だけひよっこり顔を出して挨拶した。

「それじゃあ、今日は突然失礼しました。」

「いえいえ、うちはいつでも大歓迎ですから」

俺って調子いいなあ。

「じゃあ、セイカちゃん、明日学校でね。」

「ん、気をつけてね、青子ちゃん。」

「さようなら。」

コクハが最後にそう言っただけで青子先生は帰っていった。

その後、茶の間に戻って、飯作るのにはまだ早いのでぐーたらしようとして寝ころび。三人でどうでもいいお笑い番組を見初めて数十分。

「あ、青子ちゃん忘れ物かなあ？」

とセイカが口火を切った。

俺が身体を起こし見ると、セイカのその手にはテレビのリモコンよりも平たい小さな白の携帯電話が握られていた。

正直、これはチャンス到来と言っただけではなかったらう。

そうして俺は立ち上がった、その携帯電話を届けることにした。

これに対し、姉妹は「獣だなあ」「心象丸見えだな。」とかいちいち邪推して責め立ててきたが、そんな言葉はもはや俺には通じない。

人がモノを忘れたのでそれを届けに行っただけ、いったい何が悪いのか。いや、ごく自然なことなのだよ。

優しさでしょ。むしろ優しさだよ。

俺はいつもそうだ……。

口ごもる夜の宅地を男が一人歩いていた。黒いパーカーのフードを目元まで深く被りユラユラときこちない動きで男は道の端を伝うように歩いていった。

男は宅地の角を曲がる度にキョロキョロと何かを警戒するように道を見渡す。そして誰も居ない夜の片隅でホツと一息を着くのだ。

それから男は貌を上げた。遠く、夜の帳の向こうに闇の中うつすらと雲が月光に照らされているのを見上げているのだ。しかし当の月は見えない。それはきつとその照らされた雲のその後ろに彼が隠れているからだろうと男だつて分かつてはいた。

それでも男は突然闇の中押し寄せる波のような強烈な不安を覚えた。

それは安心の中の恐怖なのか、恐怖のその向こうの筆舌に尽くしがたい、それは不毛という不安だつたのだろう……。

そして男はまた同じ思いを繰り返していた。

俺は……いつもそうだ。

最近金も底を尽きた。それに警官だつて警備を強めていて外に出てもろくに用も足せない……。

男はそう思うと深くため息をついた。その足取りは死者のように淀んでいて、それはまさに廃人の風袋だった。伸び散らかしたあごひげが夜風になびくと男は自分自身の体の悪臭に少し鼻の付け根をよじらしたりした。

そしてまた思う。

俺はいつもそうだ。

その場しのぎの思いつきばかりで後々のことなど考えていないからこうなってしまう。結局何もかも收拾がつかなくなってそれから逃げるために次のバカをしでかしてしまう。なんてダメな男なんだろう……俺は。

男は萎びていた。身動きの取れないこの状況にうんざりしていたのだ。もうこのままでは自分が自分自身に戻れなくなってしまいうな不安が頭からこびりついて離れない。しかし抜け出すことも許

されない。もし見つかってしまえば俺はきつと殺される。

死にたくはない・・・死にたくはないのに、俺はまるで生きていく気がしない・・・。

こうして男はその日も真夜中の散歩をした。そうして少しでも外の空気を確かめなければおそらく男は・・・自分を忘れてしまう寸前まで来ていたのかも知れない。

\*\*\*

「マコトお、おまえなんかここ一週間くらい灰原の家行かないなあ。」

夜、寝る前に歯を磨いていたセイカが、洗い場で口をゆすぐとそのまま片手にすすいだ歯ブラシを持って俺に訊いてきた。

「んー、あれさあ、もう行くの止めようかと思ってね・・・。」

俺は友達の家から帰ってきたばかりでダイニングテーブルに俯してうたた寝状態の意識朦朧で返事した。

「なんだ？飽きたのか。」

「いや、そういうんじゃないよ・・・なーんか、人のこととかより自分もがんばらなきゃなあ・・・。」

眠り眼をこすってセイカを見る。セイカは青いパジャマを着て俺の隣の丸椅子に座っていた。

俺の返答を訊くとセイカは少し腑に落ちないような貌をして小首をかしげるが、すぐにあっけらかんとした。

「ふむ・・・ま、いいや。それならさ、もう言ってもいいだよ。」

何かを言おうとしているようだ。俺は目をしっかりと開けて体制を起こした。

「ん？何が。」

「いやさ、わたし達があの家のを調べてたかだよ。おまえも気になってたでしょう。」

それは灰原家に行ってたとき、セイカがしきりに行ってた奇妙な

行動のことだろうと、俺はすぐに思った。

何かを探る行動。持ち帰った髪の毛。それと病院にもつれてくれた・・・あの時もコイツはおかしな行動をとっていた・・・。

「ああ、そうだ。アレ何やってたの？」

「うん、それがねえ、おまえ訊いても信じないよ。たぶん。」

眠気の為かもつたいぶられても、ああそうですか、じゃあまた今度、とは言う気になれなかった。とゆうかこの時俺は少しコイツのおふざけや奇妙な話に付き合いたかったのかも知れない。そういう気分だった。

とゆうか今の俺なら少々ヘンテコで現実味のない妙な話も信じられる。そういう気がしていた。

「うん、いいから言ってごらん。」

だから俺は話しを急かした。するとセイカは食いつきの良さに喜んで感じて二カつと不敵に笑った。

「よし、いいでしょう。コクハっ、もう話してもいいだろう？」

「ああ、好きにしる」

そうして妹に許可を取る。妹は開けはなされたふすまの向こうの茶の間で文庫を片手にこちらをうかがうこともせずには答えた。やはりコクハも絡んでいる・・・。

なんだかなあ・・・。ずいぶん姉妹に蚊帳の外にされていたが、何を話されるのやら・・・。

「これはね、ちょっとした妄想ゲームなんだよ。」

セイカはそう言うとダイニングテーブルに肘をついて寄りかかった姿勢で俺を横目に見た。

「だから信じなくて良い。ただこういう可能性だってあるかもって感じて楽しめればいいんだ。」

「妄想ゲーム・・・ねえ。で、なんだよ、とりあえず話してみ。」

妄想ゲーム・・・。なんのことやら。まだ少し眠い。俺はあくびをした、そしてちょうどセイカは椅子を飛び降りて、すぐ近くの壁にあるスイッチを押してキッチンの電気を消した。

「電気は消さなきゃね・・・雰囲気が出ない・・・」

ダイニングキッチンは突如闇に落ちた。明かりと言えば茶の間の方から差し込む明かりと、背景音と言えばその茶の間から聞こえてくるバラエティー番組の微かな轟然とした喧噪だけだった。それが逆に茶の間とここを解離させたような感覚を思わせた。

そこは静まりかえった。ちょうど肝試しの夜、序章として怖い話を暗い部屋で行うような雰囲気だった。

「よし、じゃあ、まず話はある男から始まる。」

セイカが両肘で身体を支えながら上を見上げて語り始めた。

「男の名前は灰場辺見。男は日本人とドイツ人の両親の間に生まれた。」

男の家庭は裕福とは言えなかった。男には兄弟もいなかったし一人息子なら普通、いくらか贅沢になれるモノだと思いが、実際はそうでもなかった。男には兄弟もいなかったが親らしい親もいなかったからだ。

男に母親はいない。もうとうの昔に死んでしまったと聞かされている。男の父は男と違って黒髪で堀の浅い日本人的な貌をしていた。それとかわって男の方はやはり父と違って彫りが深くその髪色は暗めの茶褐色だった。だから男はなんとなく母親は自分と同じ髪の色と貌をしているんだとは思っていた。

物語の始まりは男が小学生後期ぐらいからがちょうどいいだろうか？

その頃男は、少年だった。男の父が仕事である個人タクシーを営む街、その河原沿いの古びた住宅街に面する木造アパートから男は毎日近くの小学校に通っていた。

小学校では男は影の薄い子供だった。男の通う小学校には男と同じような髪の色や貌をした生徒はほとんどいなかった。普通男のように茶色い髪でくっきりした目鼻立ちをしていればそんな場所では

皆の視線が集まり、影が薄いなどと言うことはないと思うだろうが、現実問題彼は影が薄かった。というよりきつと男には自分の類い希なる特徴を活かして注目を浴びるようなセンスは無かったのだと思う。そしてそんなモノ欲しくもなかったと思う。

正直、男は妙な集団に目をつけられ力でねじ伏せられパシリになるようなことは避けたかった。そしてそう言う人間をたまに見つけるとバカらしいとせせら笑う気にもなれなかった。

目立たない方がいいに決まってる。それは父親が男に教えてくれた唯一の格言だった。

男がいつも学校から帰ると父親は六畳間の畳の上で寝ながら小さいテレビを点けてみていた。しきっぱなしの布団、喰いっぱなしのコンビニ弁当。ボーツとテレビを見て、あまり言葉を発さずじっとした父親のソレは間違いなく自分に引き継がれていると知っていた。

男が飯を食いたいと言うと、父親は寝たふりをした。男が給食費がないというと、父親は寝たふりをした。

そしてあんまりに男がしつこいと必ず最後にはこう言った。

「腹が減れば食べ物をとってくればいい。金がなければ金をとってくればいい。おまえももう小学校上級生なんだから、それぐらい一人で出来るだろう。」

男はそう教えられ、それでもその「とる」と言う意味の中で自分なりに考えた末、やってはいけなさと感じ取って、それを実行には移さなかった。それは善意からではない。むしろもつと男の格言に根ざしていた感情から生まれた意思だった。

そんなことをすれば自分は目立ってしまう。いつか見つかった公の前に突き出されるに決まってる。

だから男は父親がそう言っても断固としてそんなことはしなかった。そして、そうしていると父親は決まって最後には男に食事や必要な金は渡してくれた。それも自分の保身のためだろうが、それでも男は良かった。

それに男の父親はとても良い人間とは言えなかったが、男に暴力を振るったりはしなかった。ただ寝る場所は与えて後は男のことに一切踏みいるようなこともしなかった。だからほとんど喋りかけても来なかった。たぶん男の父親は男に対してあまり興味がなかったように思える。

そうして男は幼少期を送った。

そしてじきに男は中学校にも入学した。その頃になると父親もぼちぼち働けと、男に新聞配達やら何やらとさせた。毎日、毎朝。三時過ぎから起きて一軒一軒の家のポストに新聞を入れる。まだ中学校に上がったばかり少年にとっては結構な労働だった。

そうして努力してもらった給金を受け取るとき、男は嬉しかったが、その手の中にある札束のほかほかとした暖かさはつかの間の夢、家に戻ると父親はいつもその男の汗と涙の結晶を奪い取った。

家賃だそうだ……。

その頃、まだ男の父親は男が限界寸前になるまで食事を与えないことなどザラだった。

ある日のこと、給食費の滞納が半年を超えて学校から通達が来た。男は父親にもう限界だとせがんだが、父親は財布の紐を解くことがなかった。

魔が差したと言ったらソレまでかも知れない。さすがの男も翌る日、同じクラスの少年のカバンから給食費を盗んだ。

正直、胸がどきどきして、見つかることを恐れて男はちぐはぐな行動をとってしまったのだと思う。結局、その窃盗は盗んですぐにクラスメートに見つかる形で失敗に終わった。

こっぴどく叱られ。クラスのみんなの侮蔑やら敵意やら好奇やらの目に四方八方から刺されることになった。少年だった男にとってはこの世の終わりのような自体だった。

家に帰ると父親が憤怒して男を叩いた。学校から連絡があったのだ。それでも父親が怒るなんておかしな話だと男は思った。

自分がそう言うことをしたのは第一に父親本人の為だし、父親は

そうすると男に言って聞かせていたくらいではないか・と。

男は色んな意味で打ち拉がれた。そして思った。これではダメだ。思っていたとおりだった。盗るのはダメだ・・・。それでも無くなったらどうやって補えばいいのだろう？金も食い物もどうやって手に入れればいいのだろう？

そんな頃だった、男の前に借りるというテーマが浮かんだのは・・。

その頃、男の通う中学校では金の貸し借りやモノの貸し借りは日常茶飯事に行われていた。

男はそれに手を出した。色々な人に「ソレかして」とまずは言うてみることにしたのだ。最初は色々なモノがすぐに手に入った。

今まで持つてなかったモノ。ゲーム、本、金。色々なものがすぐに手にはいること、もはやそれ自体が男にとって面白くてしよすがなかった。

それでもそれだつてつかの間、借りているウチにかしているヤツラは嫌がるようになった、だつてそれはそつだ。貸し出すと言うことはそれなりの見返りを信じて貸し出すのだから。それなのに、男と来たらてんでダメだった。それもそのはず、男の持ち物と言つたら、新聞配達のために父が初めて自分に買ってくれたギアもついでない古くさい自転車ぐらいだつたのだから。人に何かを貸してあげられるようなものなど持つていなかつたのだから。男は人に借りを返せるような財を持つたことなど最初からなかつたのだから。

そうして男のつかの間の幸せは終わつたかのように思えた。しかしそれでも男はくじけなかつた。

男は勉強をした。そして高校に奨学金を申請して奨学生として入学した。奨学金は学校からのモノではなかつた。男にはそれほどの成績はない。その代わりに民間の奨学金支援から金を借りて高校に通つたのだ。

高校デビューをした男は、心機一転自分を改造した。それは一種の擬態だつた。

男は昔テレビでカメレオンという生物を見たことがあった。その生物は背景となる存在、木や草などの色を借りて擬態する、そして獲物を騙して捕まえるのだ。

男は自分もそうなるうと思った。それこそが自分に相応しい姿だと確信していた。

目立たないこと。これ以上に大切なことはない。

つまり男は高校に上がって性格を変えた。人から見たらどう見ても雰囲気の良い落ち着いた魅力のある青年を装った。

そうすると簡単に他人からなにかを借りることができたのだ。本当の自分をかぎりなく0にして、その上から偽物を貼り付ける。

男がソレまで築いてきた影の薄い存在をつかえばそう難しいことでもなかった。

0ほど簡単に他の数字に変えられるモノはない。真っ白なキャンパスであれば上から色を塗ったらよほどそのキャンパスは元からその色であったように見えるモノ。だれもその下に白があつたことなど予想できない。

男は、偽物の自分で友達を作つて、偽物の自分で人からモノを借りた。借りたモノはうまく誤魔化して返さないことが多かったが、だれも男を責めることがなかった。むしろ、男がそんなことをするなどと言うこと自体に頭が回らなかったようだ。余程の疑り深い人間でも騙されるほど、男の変化は器用だつたと言えるだろう。

男はこのうますぎる自体に、これこそが自分の生き方だと確信し、そしてそうやって生きることを決意した。

高校を卒業し、男は家を出る口実もかねて東京に渡り、大学に入る。

男は心理学の道歩んだ。

もっと人の心理を見透かして、もっと色々なモノをみんなから借りようと思った。

そこでも男は借りることを止めなかった。それどころか日に日に男の演技は研ぎ澄まされ、元々の男の面影はまったく消えた頃、男

は完成していた。

男は大学を卒業すると、とある複合病院にある保育福祉センターに心理カウンセラーとして就職した。

しかし、そこで男は大きなミスをおかすことになる。

男には就職してから出会った友人で仮名Aという男がいた。そのAから金を借りたのだ。正直、その頃の男は前とは比べものにならないほどの金額をかりるようなことが度々あった。

それはもう、人から借りた金だけでも充分暮らしていけるんでは無いかと言っぐらいである。

しかしそのAは今まで借りてた相手達とは少しばかり違った、非常に執念深く、疑り深かった。男だってそういうタイプには気をつけるようにしていた。

それでもその頃の男は少し調子に乗っていたのかも知れない。

男がいつまで経っても金を返してこないと分かるとAはとんでもない行動に出たのだ。

もちろんAとの貸し借りで法的に有効とされるような証明書など作っていない。ましてや今までやってきた貸し借りだって男はそんなあざといモノなど作らせはしなかった。金の貸し借りは基本、口約束。これが男のスタイルだった。

しかし、Aは訴えがきかなくても諦めなかった。

男の身边を洗って、今までに男が金を借りた人間達に次々に連絡を取ったのだ。

額の小さい者はほとんどが取り合いもしないでくれたが、額の多い者になると違った。彼等は一斉に心の片隅にあった不満を膨張させた。男に貸した金を思い出して憤った。

そうしてAは男が金を借りた連中を束ねて男に返済を要求してきたのだ。

男に逃げる術もない。どうした者かと思ってもそんなにいつぺんに返せるような金は男の財布をどんなにひっくり返しても出てきてはくれない。

しかたがない、男はその時、その場しのぎで多数のサラ金から多額の借金を抱えることで彼等への借りを返済した。

しかし、そのために、それからの男の生活は非常に大変なものになった。

サラ金の返済は男が今まで味わってきた甘つちよろい貸し借りとは天と地ほどの差があったのだ。借りたら必ず返済の請求が来るのはもちろん、トイチの利息とはよく言ったもの、事実それに近い量の利息付きで元金の返済を迫られるのだ。

もちろん男の収入ではそんな無理な返済を続けられるわけがない。男はしょうがなく他のサラ金から借りた金でまたサラ金に返済をするようなバカな方法をとることになった。

しかし、そんな方法では借金はますます、膨れあがる一方であるのは瞭然。

返済がいよいよ行き詰まるそのうちには男はとうとう手を出してはいけない場所へ手を出すことになってしまった。

それは一般に闇金融と言われる金融機関だった。

男自身この頃は理性のタガがおかしな事になっていたのは事実。

闇金の高利貸しから借りた幾らかはあつという間に男が見たこともないような金額まで飛び上がり、そして返済請求も今までとはまったく異質なレベルになっていった。

勤め先の病院に電話が来るのはもちろん、友人の携帯電話から、実家への催促（まあ、これは問題ではなかったが・・・）、はたまたどう見てもカタギじゃないのが家に乗り込んできてやりたいほうだい暴れていくこともあった。不法取り立て・・・それになすすべも知らない男は恐怖しか覚えなかった。

借りて、借りて、借りて、借りて、そして借りた金で返して、また借りた金で返して・・・行き着く先の地獄。

自分の選んできた道の果てが、この様な姿をその後ろに隠していたなど男は知らなかったのだ。正直、今までは色んな人を騙してきたつもりだったが、彼自身、自分を騙していたようなものとさえ

思った。

そんな後悔も空しく、闇金の人間達は借金の総額が桁違いに膨れあがると頃合いを見て男に返済能力が無いことを確認し、あるモノを男に契約させた。

それは生命保険とその受け渡し人の契約であった。

正直、男はこの時ほど手の震えが止まらなかった事はない。

間違いなく死ぬ。俺は殺される。そう確信してしまった。

男はどうするべくもなく絶望していた。

そんな時だった。男にその突拍子も無い思いつきが巡ってくるのは……。

男はその頃仕事で都内のある家にカウンセリングに通っていた。

患者は二十歳を超えても、まだ部屋に引きこもっている青年だった。

親御さんがどんなに手を打っても外に出てきてはくれない。もう五年近くもそうして部屋に籠もりきりだという。

最初は男も仕事としてドアの外から呼びかけたりといくつかのマニユアルにある対応などをとっていたが、ある日、ひよんな閃きを思いついてしまったのだ。

社会復帰の出来ない成人男性がいる。彼はもはや外に出て人と出会うのが怖くて怖くて心の底から拒絶してしまって外に出れない。

それも長い。もはや治療しても完治するか否かも不問だ。

もしも他人と一切の繋がりを絶った人間がいて、それは生きてると言えるのだろうか？むしろそんな状態では生を感じるかなど出来るのだろうか？人間は他者がいて自分がいる、その間でこそ人間として時間を感じることが出来るもの……ならば彼は生きてないではないか？生きてない人間の人生に何をしたらって悪さにはなるまい。むしろ、かれは俺にその状況を提供すべきではないだろうか？

と、そう言う風に男は思考が巡った。

コイツになりすまして、この家に住み着けば、追っ手は足取りが掴めない……。俺は死なないで済む。

男は狂氣的ながら信じられない方向へと打開策を編み出したのだ。そうして男は、ある日の夜、突如姿を眩ました。在職していた病院にも突然来なくなり、友人関係も何もかもから男との連絡方法は消えた。

文字通り、男は消えていなくなった。それはちょうど一年ほど前のこと、誰もが彼の行方を見失った……。誰もが彼の影を見失った……。

「どうだった？」

薄目を開いて暗闇の中、セイカは話し終わると活き活きとした目で俺の反応を確かめた。

「ん……。ああ、少し寝てたかもしれん。」

正直にあくびをして俺は答えた。するとセイカは呆れ顔で

「ぬあ……。おまえねえ、人がまじめに話してんだからさあ……。」

「でもさあ、妄想だなあ。第一現実味がない。最後ソレって結局患者になりすましちやったってことでしょ？」

「なあんだ、聞いてんじやん。そそ、そゆこと。」

そう言つて、セイカは丸椅子から飛び降りて電気を点ける。

まばゆい光りが広がり、ダイニングキッチンが色づいた。

「まあ、人の家の天井裏で赤の他人が暮らしてたとか、コンビニの天井裏で生活してた男とか、そんな事件も実際にあった気もするけどねえ……。」

俺は煩わしい眩しさにしかめっ面ながら感想を付け足した。

「まあ、妄想ですから。妄想。」

セイカは二カツと不敵に笑って横目でそう言う。

「妄想……。ねえ……。」

なんだかなあ……。

「あ、コクハあんなところで寝てるよお。」

茶の間の方で机に俯して寝ているコクハを指さしてセイカが言った。

「あゝあ、風邪ひくぞお。セイカ、部屋に連れてってあげといえ。」

「おっけい。」

「俺眠い。もう寝るわ。」

「おやすみい〜。」

自室に向かう。足取りはそのそのと・・・。

まったく、なんだかなあ・・・。妙な話だったが、結局俺は一つ聞き忘れていたことにここで気付く次第だ。

あの話の何が、最近の灰原家でのセイカの不審な行動やそれらもろもろの疑問への答えになっているのだろうか？

なんだかなあ・・・と思う。が正直もうどうでもよくなってきた。それよりも今は早く寝よう、眠い。寝たいという感覚に逆らうことは難しい・・・。

/ 5

三週間後。

思ってみれば、あの時、セイカがした奇妙な話こそ、この事件の真相を言い当てていたのだろう。

つまり姉妹は知っていた。そこまで解けていて、謎が自分達の中で解明されればあとは妄想ですから程度で放っておいたのだ・・・。

俺の手には一週間ほどまえの日付の新聞が広げられていた。そしてその一面には一つの大きな見出しとリードで、ある事件について掲載されていた。

”ひきもりなりすまし犯”と妙な見出し。その記事の内容はこうだった。

都内某区の住宅街で付近で警戒されていたフードを被った不審者が巡回中の警察官によりついに掴まった。捕まった男は以前にも幾

度かにわたり警官との追っかけ合いになるようなことがあり、なんらかの事件に関与しているものと見て警察では厳しい事情聴取を行った。その結果、なんとも驚くべき事件が発覚したそうなのだ

男の名前は灰場辺見（28）。都内某所のノ工学心会医科大付属のソエル記念病院にある精神福祉センターに勤務するカウンセラーだった。が、実はこの男、昨年春先から行方をくらましていたということが判明した。

センターからも交友関係からも一年以上の連絡を絶っていた男が何故か都内のそのような場所で今になって不審者として補導される。警察の取り調べが進むとこの事態に何とも異例の自供が灰場の口から飛び出した。

「今どこで暮らしている？」という警察の質問に対して灰場の返答は「昔の患者の部屋に住み着いている」というなんとも耳を疑うような言葉だった。

その後の調べで灰場は自分がカウンセリングをしていた引きこもりの青年の部屋に無断で侵入し、青年を拉致監禁するとそのまま自分が引きこもりの青年になりすましてその青年の親兄弟もいる家で一緒に暮らしていたのだというのだ。

話を理解した警察はすぐにも被害者の青年の自宅へ向かい安否を確認した。幸いなことに青年は自分の部屋のクローゼットの中で衰弱した状態で発見されたが、命に別状はなく病院に搬送され回復治療を受けることとなった。

警察ではこの様ななりすまし事件が一年以上も継続するのは前代未聞のものとして、様々な分野には波紋を広げた。

なんだかなあ……。一週間ほど前、発覚したこの事件。新聞に載る前に俺はカイの親父から連絡を受けて知った。

最初は当然耳を疑った。だってそうだろ？詳細を訊けば聞くほどそれは姉妹の言ったとおりの内容だったのだから。

その後俺はすぐに姉妹にかけあった。

まず、このことにもつと前から気付いていたのか？それには姉妹は「さあ・・・」「関係ないね」と白を切った。

どうやらこの後にどうしてもつと早く言わなかった？と言われるのが嫌だったようだ。だから次に俺はどうやって知った？と聞いた。すると今度はコクハが説明を始めたのだ。

最初はそう、セイカが灰原家で妙な場所を見たのが発端だったそう。

あの時、セイカは灰原家の塀の向こうの地面にあるくぼみを見つけた。それは丈の短い草が生い茂る裏庭の一部。楕円形に草が禿げて土が少し凹んでいる場所。

セイカはその一部だけの異常に興味を持ち灰原家を調べることにしたのだ。そして他に見つけたモノ。黒髪だけの家族の灰原家では見つかるはずのない茶色い髪の毛。誰も屋根に登っていないというのにある屋根の靴跡。

そういつた情報を家に持ち帰ったセイカはコクハにそれを伝えて、コクハは推理を始めた。

数回の訪問のウチにもセイカは同じように家を調べそして前に見つけた異常が継続的なものであり、それらに変化がないかも調べた。最初コクハは、髪の毛に注目したそうだ。

灰原家には黒髪の間人しかいない。それなのにセイカが二階の廊下や一階のキッチンなどで見つけた髪の毛は明らかに茶色く、濡らしたりして匂いを嗅いでみても、薬品らしい匂いは感じなかったという。つまりそれは染められて茶色くなった髪でもない。そしてそんな髪の毛がよく探すと結構な量が見つかり、しかもそれは毎回の訪問の際にも変わり無く発見された。つまり、継続的に誰かが茶色い髪の毛を落としていることが分かった。そしてそれはおそらく灰原家の人間ではない。

ここですでにコクハはカイの存在に目をつけていた。誰か灰原家の家族では無い人間がその家に潜んでいる。度々無くなるという冷蔵庫の食品のこともその誰かの犯行であると。

そして他の二つの謎。それもそう考えると分かりやすかったそう  
だ。

地面の禿げて凹んでいる部分は灰原家の裏庭に面した壁側にあっ  
た。そしてその壁の向こうは一階の風呂場。その風呂場の上は一階  
の屋根になっていた。それは灰原家が裏庭に面した風呂場部分だけ  
二階より飛び出している形をしているからだった。

そしてその一階部分の屋根、その屋根こそが実は靴の跡が見るこ  
との出来る場所だった。

つまり、地面の禿げた凹みと屋根の靴跡はちょうど一直線の位置  
にあった。しかもその直線上にはカイの部屋があったのだ。それは  
即ちカイの部屋が風呂場の上の屋根に面しているということ。そし  
て屋根にはカイの部屋の窓から自由に出入りできると言うことだっ  
た。

つまり誰か茶髪の間人がカイの部屋に住み着き、その部屋の窓か  
ら外へ出たり入ったりしていることが予想できたそうだ。地面の禿  
げた凹みはおそらく何度も屋根から飛び降りた為だと・・・。

しかし誰が？

そう思った姉妹は、次に灰原家に以前まで通っていたカウンセリ  
ングの男の失踪ということに目をつけた。そしてその詳細を知るた  
めにカウンセリングが派遣されてきた病院へ保護者として俺を同伴  
する形で情報収集に行ったのだ。

正直、あの時俺はセイカが色々な職員に話しかけたりしているの  
を見ているだけで何をやっているのかさっぱりだった。それにセイ  
カにそのことについて訊いてもろくな返答を返してもらえなかった  
のだ。

そうして灰場辺見という男を知ったセイカはその後灰場につい  
て自分で調べて、男が金銭トラブルで困っていたことまで知った。

これはコクハから後で訊いた話だが、セイカはいつもバカみたい  
だが、物事を調べるといふ一点に関してはあなどれない感性を持っ  
ているのだそうだ。鼻がきく、コクハはそう言っていた。

そこまで調べるとコクハは全ての謎が解けてしまったらしい。

それはここ一年間の不審者の出現。コクハはそんな大胆な切り口から灰場の外出との時期的な一致関係を思いつき。不審者の正体も余もすれば灰場だと分かっていた。

おそらく犯人灰場は一年近くの潜伏の間に用意していた金が底をつき、家の食品などにも手を出していた。夜しか外に出れなくて長期間の引きこもりに極度のストレスを感じ脱毛が生じたため、髪の毛が歩いているだけで落ちてしまったのだと推理した。

そうしてその推理を姉のセイカに伝え、それをセイカは自分の調べた灰場のデータでさらに膨らませて俺にあんな話をしたのだ。

姉妹は基本的に妄想ゲームは好きだが、犯人を捕まえることには興味がないと言う。

所詮、全ての推理が想像の域を出ない。証拠も不十分。だいたい証拠なんてモノが本当に存在したら、推理なんて必要がない。だから彼女たちにとってそれは自己完結で終わらせられるゲームで充分なのだそうだ。その中には現実での立証さえも必要がない。方程式さえ解ければ、そんなものなんて誰かが勝手に見つけること。ようはゲームなのだ、妄想なのだということらしい。

それにコクハはこうも言った。

体力的に限界が来ている犯人はおそらく近いうちに捕まるのは分かっていたこと。夜の散歩は最近の殺人事件の為に警察が警戒を強めていることからへんでは危険すぎる。

あの殺人事件の捜査範囲には事件があった下北沢だけでなく金城周辺も充分に入っているらしいのだ。

そしてコクハは最後にこう付け足した。

「犯罪を犯すモノはその犯罪に拘束される。灰場辺見は典型的な犯罪者だったってことだろう。」

俺にはよく分からない。

灰場って男のことも、引きこもりって病気のこと、姉妹が言う妄想ゲームのことも。何が何だかさっぱりだが、それでも一つだけ

言えることがある。

あの姉妹、俺の妹にしてはちょっと変だ、という事である。

B l a c k , n B l u e / E N D

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6240i/>

---

B&B 第一章

2010年10月17日02時19分発行